

フリードリヒ・カール・カウル¹著

私は真実を述べた リリー・ヴェヒター

—平和のための闘いにおけるドイツ女性の模範

翻訳 木戸衛一

リリー・ヴェヒターとの出会い

「カウル博士、彼女を駅に迎えに行く時間です。列車は 13 時 12 分着だそうです。」イギリスの老練弁護士〔デニス・ノウエル・〕プリットが気にして私を見た。早朝以来私たち二人は、フランクフルトのホテルの小さな部屋で坐っていた。もう一度（最後に）、明日 1 月 10 日に始まる米高等法院での審理のために、初審理の記録と米検事総長の書面を仕上げためだ。

「私たちがすることも、もうないですね」と私はプリット氏に同意し、「行きましょう」。数分で私たちは、駅前広場に流れる静かな横道を歩いていた。駅そのものに着くまでは、ずっと時間がかかった。歩行者のことなどまるで気にせず、トラック（ほとんどどれも米国の識別番号をつけていた）が広場を走り、スピードも緩めずに交差点のカーブを横切った。

統計的に最近はっきりしたのだが、ドイツで米国占領地区が最悪の交通事故件数を記録している。米国人は西独で、故国以上にくつろいでいる。

プリット氏は、横柄に両手をズボンのポケットに突っ込み、ガムをクチャクチャやりながら、駅の入り口でウロウロだらしのない態度をしている制服の米国人を見ていた。「カウル博士、あなたはドイツ人で私は英国人ですが、私たちは同じ境遇にいる感じがします」と彼は私を覗き込んだ。

彼は笑いながら、「つまり、私たちの国はいずれも米国人に占領されているのです！」と言った。そして、英国に駐留している米軍の態度がどうか、それが英国住民にいかにか深い嫌悪、憎悪を引き起こしているか語り始めた。憎悪というのは、平の米兵ではなく、米帝国主義に自分たちの土地に軍事基地を維持するのを許す英国政府に対してだ。そして、世界を新しい戦争の危機にさらす帝国主義そのものに対してだ。

¹ フリードリヒ・カール・カウル (1906～1981)

1932 “Die Entwicklung der Freiheitsstrafe in Brandenburg” で学位取得

1933 共産主義者であることと、母親がユダヤ人であることから、司法職から追放

1935 国家秘密警察により逮捕、Lichtenburg・Dachau 強制収容所へ

釈放後コロンビアへ→1941/42 ニカラグアで抑留、米国へ

1945 ドイツ帰国、東ベルリンへ

共産党、社会主義統一党。ベルリン放送局法律顧問、1948-西ベルリンで弁護士活動

共産党員への迫害、米軍の犯罪、アウシュヴィッツ裁判などナチス犯罪の追及

1972-1981

東独テレビで「カウル教授に聞いてください」 (Fragen Sie Professor Kaul) シリーズ

プリット氏の人生の活動は、まさにこの危機と闘うことに捧げられてきた。1933年、ロンドンで開かれた、国会放火事件解明のための対抗法廷の裁判長を務め、ナチスが自ら、ドイツの進歩勢力を壊滅させる安っぽくも犯罪的な口実をつくるため、ヴァロットの建築物に放火したということ立証した。故国・英国だろうと、インド、オーストラリアだろうと、プリットは、帝国主義の犯罪で脅かされた権利を守るため最前線に立った。そうした理由から、彼がドイツ人女性リリー・ヴェヒターを米高等法院で弁護することになったのだ。

だが今はもう、あれこれ考えを巡らせる時間がない。駅の南側には、封鎖線の前で人垣がせき止められている。ガタガタと急行列車が、どんよりとした気候ならもっと暗い感じがする中央駅の駅舎に入ってきた。人垣がますます増え、それは身内や友人を出迎えようと待っている人の数をずっと越えている。

「何なのかしら、ダーリン？」と金髪の女性が米国人のボーイフレンドに尋ねている。「多分また映画スターが来たんじゃない？」とは、ウォール街の英雄の面倒くさそうな答え。

だが、群衆に多くの勤労者がいたのだから、彼は勘違いをしていると気づくべきだった。西独では日常茶飯事になっているようなコマーシャルに踊らされてやって来た人々ではないのだ。列車がキキッと停まり、最後の疑念が取り除かれた。たくさんの横断幕が、



リリー・ヴェヒター

待ち受ける人々の頭上に掲げられた。「ドイツは第二の朝鮮になってはならない！」「平和のための闘争！」「リリー・ヴェヒターに自由を！」。そして「リリー・ヴェヒターに自由を！」の叫び声だけが、薄暗い駅舎に響いた。勤労者のフランクフルトが、警察のテロにもかかわらず、この時刻フランクフルト入りしたリリー・ヴェヒターに歓迎の挨拶を伝えたのだ。

群衆は、上司の指示に明らかに不承不承従っている警官によって押しのけられなかった。彼らはホテルまでリリー・ヴェヒターに同行した。私たちプリット

氏と私一は、ゆっくり人の流れについて行った。ただ、リリー・ヴェヒターがもう一度窓から姿を見せるだろうと期待してホテルの前にとどまっている人々をかき分けて、ホテルの入り口に行くのは一苦労だった。やっとのことで私たちは、ホテル「ハンザ」の質素な応接間でリリー・ヴェヒターに対面した。

「あなた方が明日米控訴審で私を弁護して下さるのですよね？」と、彼女は飾り気なく私たちと握手した。ちょっと考えて彼女は「弁護というのは適切な表現でないかもしれないですね」と続けた。「私は罪を犯したわけではないですもの。あなた方は、米国が朝鮮で犯した犯罪を告発する私を手助けしてくれる、と言った方がいいかもしれないですね。」

「そのとおりです、ヴェヒターさん。この種の裁判では、いわゆる被告が原告になるのです」と私は答えた。それから私は、リリー・ヴェヒターをゆっくりと観察し、彼女の人柄がある程度知ることができた。私に相對して坐っている女性は物静かで、世間の注目的になっている人物を思い上がった態度に迫りやがちなルーティンなどない。この時事情を知らずに部屋に入ったら、物静かさを保った母親のような女性と、才気あふれ

る横顔の初老の男性との話は、母親が呼んだ医者に、子どもの病気に効く手立てを報告しているのだと思ったに違いない。

少女時代、そして結婚

リリー・ヴェヒターは、19世紀から20世紀に移る直前、カールスルーエに生まれた。その頃カールスルーエは、単調な静けさの一退屈というわけではないが一田舎町だった。ベデカー旅行ガイドでは、バーデンの「典型的田舎」の「王宮所在地」は、一つ星しかつけられていなかった。その外には行政の中心地で、ひどい埃まみれにもかかわらず、無秩序ではなかった。この地方は大土地所有も目立った産業もなく、帝国のその他の地ではますます深まっていた社会的対立も比較的少なかったからである。

バーデン邦がいつもそうだったわけではない。1532年にはここで、「農民戦争」と呼ばれた、搾取された農民たちの支配者に対する革命が起こった。これは、ドイツの平和的・民主的発展にとって、数々の逃したチャンスの最初のものであった。

そしてもう一度1848年に、当地の人民は武器を取った。〔フリードリヒ・〕ヘッカーと〔グスタフ・〕シュトルーフェの民衆軍が、〔ゲオルク・〕ヘアヴェークの自由の歌に鼓舞されて決起したのだ。ここで、命の危険に晒されながら、若き詩人ゲオルク・ビューヒナーが「榴弾王子」の手先から逃れ去った。これは後年の皇帝ヴィルヘルム1世で、彼はバーデン政府の支援要請を受けて、「血と鉄」でもって甚大な損失を出しながら、民衆運動を鎮圧したのであった。平和的な道にドイツを導く第二のチャンスは、こうして潰された。これらの歴史的な事件から残ったのは、未知のブルジョワ的自由への無意識な傾倒である。残ったのは、役人的な無気力の中でぼんやり暮らす首都カールスルーエをもつ「模範邦」という呼び名である。

これがリリー・ヴェヒターの生まれた町だ。小商人だった父は早死にした。母は寡婦年金を頼りに、7歳になるかならないかの娘とフランクフルトに移った。ここで彼女は再婚した。リリー・ヴェヒターは第二の父親を、「義父」とは感じなかった。母にも、再婚と弟の誕生があっても、よそよそしくはならなかった。家庭生活は、非常に珍しく調和的だった。ナチのテロの犠牲に倒れるという3人の運命により、リリー・ヴェヒターは後年、平和のための戦いで最前線に立つ道を歩むことになった。

フランクフルト・アム・マインでリリー・ヴェヒターは学校に通った。まだ半分子どもの頃、彼女は第一次大戦の勃発を経験した。独仏英の帝国主義者が結託して引き起こした殺戮の幕開けだ。社会主義政党的指導者たちは、労働者階級を裏切って、帝国主義的利益の擁護を呼びかけた。1914年8月4日、ドイツ社会民主党（SPD）は議会で、帝国主義戦争を支持し戦時公債に賛成した。フランス・イギリス・ベルギーなどの圧倒的多数の社会主義者も同じことをした。祖国防衛の旗の下、いわゆる労働者の指導者たちは、ドイツの労働者をフランスの労働者に、英仏の労働者をドイツの労働者にけしかけた。しかし、皆が皆ナショナリズムの害毒に汚染されたわけではない。帝国主義戦争反対のデモ、民族殺戮に反対する個人々の英雄的な闘争は、それを立証している。

だが、ドイツ労働者層の大半は、破壊者の言い草に屈服した。彼らが「政党など存在しない。あるのはドイツ人だけだ」という言葉で徴集され、マース川・ソナム川での物量戦で死に、無限のロシアの大草原での厳冬に破滅したのはひとえに、ドイツの大資本家がロ

ンウィヤブリエの鉱山を利用し、東独のユンカーが東方への領地欲を満たしたいからだったことを認識しなかった。

ドイツ労働者が覚醒し始めるのを、リリー・ヴェヒターは、ドイツの中心、ベルリンで体験した。商業学校を卒業した後、彼女は事務員の職に就いた。1917年に社会民主党に入党し、大量殺戮を終わらせるという固い意志をついに固めた軍需産業労働者のスト決議や、1年半後共和国万歳に喝采した。他の数十万人と同様彼女にも、当時も今も SPD の指導層が平和と民主主義を求める大衆の頂点についたのはただ、「運動を手中に保ち」、真に平和的・民主的なドイツの誕生を妨害するためだったことはわからなかった。何年も経って、ようやくリリー・ヴェヒターはそのことに目を開いた。1951年6月30日、彼女を党から除名したと素っ気なく伝える SPD 指導部の手紙を受け取ったからである。

この処分の理由は、手紙に挙げられていなかった。ひょっとしたら、残された恥の意識が、SPD 指導部にそれをさせなかったかもしれない。確かなことは言えないが。

1921年、リリー・ヴェヒターはベルリンを去り、その直後にグスタフ・アドルフ・ヴェヒターと結婚した。1934年まで夫妻は、カールスルーエで暮らした。グスタフ・アドルフ・リリーにとってはいつまでも「グステル」だったがーは、南ドイツの大自動車工場の事務職員だった。給料は悪くなかった。だから若夫婦に金銭面の心配はなかった。

最初リリーは、小さな所帯の面倒を見、間もなく家族が大きくなると期待した。だが、その期待は裏切られた。夫婦に子どもはできなかつた。この事実は、彼女の人となりの鍵かもしれない。自分の子どもを世話したいという希望が満たされなかつたことが、彼女を内なる孤独にし、葛藤に導いたわけではない。母性は彼女の本質に深く根付いていたので、狭い家族の範囲を越え、同胞、人類一般を迫りくる死の危険から守ることが重要となった。

だが、今はまだそこまでいかない。リリー・ヴェヒターはまだ、小さな生活圏に留まっていた。順調な家計の世話をするのでは長期的に満足できなくなつたため、彼女は電気製品工場の顧客の世話・助言を引き受けた。

一見職業上の実践でしかないのに、彼女は助言をし手助けしたくて仕方がなかった。リリー・ヴェヒターは、窮屈な職場に縛られなかった。家計が豊かとはいえない人々の生活状況への眼差しは鋭くなり始め、これらの人々にとって炊事製品を買うのは、イエスカノ一かをよく考えてしか解決できない問題となった。

また時間が経ち、リリー・ヴェヒターが結婚 10 年になった時、ナチスが政権に就いた。当初彼女の生活は、世界観や血統ゆえに「国民の敵」というレッテルを貼られ、剥き出しのナチスのテロに晒されたわけではない何十万人もの人々と変わらなかつた。1934年グステルの仕事のために所帯をバーデン地方ラシュタットに移さざるをえなくなり、生活は以前より困難になった。人口が 1 万 7000 人に達するか達しないかの小都市で、全住民がナチのボスによる節度のないスパイ活動の下に置かれていた。いかなる不満の表明、発言もごく丁寧に記録された。支配状況へのほんのちょっとした悪評も、確実にホイベルク強制収容所行きとなった。リリー・ヴェヒターが、ナチスの人種妄想ゆえに、母親の血統から「第一等混血」とされた事実は、ラシュタットでのヴェヒター夫妻の生活を難しくした。ラシュタットのナチスの「行政措置」は始終彼らに、早晚ラシュタットを去るように求めた。後年ナチスのテロがひどくなればなるほど、ラシュタットでリリー・ヴェヒターは危険に晒された。しばしば彼女は、エッピンゲンにいる以前の家政婦のところに身を寄せ、昔か

らの敬慕からあらゆる追跡から守ってもらった。

戦争が勃発し、グステルは召集された。直後、義理の兄弟がゲシュタポに捕えられ、ブーヘンヴァルト強制収容所に送られた。リリー・ヴェヒターは彼にも、1940年初頭テレージェンシュタット強制収容所に連行された義父・母にも会えなくなった。この困難な時期、リリー・ヴェヒターは全く寄る辺がなかった。恐ろしい年月の間グステルは二度だけ、数日の休暇で帰ってきた。「気を確かに。この人殺したちはおしまいだ！」この確信が唯一の慰めとなった。

リリー・ヴェヒターは、軍需工場での勤労を強要された。彼女は唇を固く結んで、旋盤のところに立った。「人殺したちはおしまいだ」と、ハンマーを打つ音が響いた。「人殺したちはおしまいだ」。彼女はそれを、輝きを失った同僚の目に見てとれると思った。「だがその後で、ドイツは変わらなければならない！」この考えでリリー・ヴェヒターは、ますます急がせ、ますます大変な仕事を押し付ける、ナチスに従順な職場長に見張られながら、苦役の間歯を食いしばって持ちこたえた。

崩壊後

1945年4月12日、ラシュタット住民にとって戦争は終わった。ラシュタットのドラマの最終幕一本当に最終だろうか？—は、多くのドイツの町や村と同じだった。

新聞やラジオのヒステリックな喚きにもかかわらず、西でも東でもドイツ国防軍は敗北し、「最後の血の一滴までドイツの故郷の地を守れ」というゲッベルスの要求は、避けられない終わりをたった数日でも遅らせようとする試みだということは、もう何週間も前に誰の目にも明らかであった。その生存がナチ党と不可分に結びついた者でさえ、もはや勝利を語ることはなく、米英が「ロシア人」が共産主義を欧州に持ち込むのを許さないだろうということを重ねた態度で暗示するだけだった。いや、諦めるのはまだ早い。最後はすべてうまくいこう。フリードリヒ大王だって、七年戦争で苦戦したではないか。

ああ、誰がこの物憂い日々にフリードリヒ大王よろしく暖炉の前の犬をおびき出したいだろうか。人々を支配していた考えはただ一つ。終わり、もう終わりにしよう。この終わりなき恐怖よりも、恐怖の終わりの方がいい。惨めな党の大物たち—フーバー地方行政長官、測量技師バーダーなどなど—は、もう自分自身の言葉さえ信じていなかった。ますます激しくなる地震のような遠方の雷鳴を聞き取ったのは彼らだけではない。前線がよいよ町に近づいてきた。空襲がひどくなる。昼間に4回、5回で、夜は休みなしだ。住民は地下室に逃げ込み、もう離れられなくなった。そして西から東へ、大砲・戦車・歩兵部隊・トラック、またまた戦車と、国防軍の残党が町を抜けて行った。解放戦争期の軍歌ではないが「馬・人・車」というわけだ。

その後断水になり、停電になった。そして、武装親衛隊の敗残部隊によるテロが何時間も襲った。さらに空襲が絶え間なく続いた。だが突然、目に見えない指揮者の合図のように、地獄の騒音が消えた。最後の恐怖の前の静けさに過ぎないのか。あちこちの地下室で、不安な疑問が募った。ところが町には、フランス軍の最初の部隊がもう到着していたのだ。まずは前衛で偵察用装甲車が数台。次に軍の主力部隊が、逃げる敵を追いかけて進撃していった。

解放され人々が地下室から出てきた。人々はこの地獄を生き延びたことを、びっくりし

て悟った。一つの言葉が口々に伝わった。リリー・ヴェヒターが「未来を指し示すものとして忘れることのできない言葉だ。「こんなことをもう一度味わうくらいなら、乾いたパンを一生食べている方がいい。」

当初はラシュタットでも、荒れ狂っていた。本来は、仏軍事当局が住民の間で即座に役に立つ者と立たない者をより分け、反ナチではないにしても政治的に悪い前歴のない人物が、完全に解体した行政を再び動かし、後年の再建の条件をつくるようまず努力すると考えるべきであった。ところが話が違った。フランス人にとって、ナチスとドイツ人の間に相違はなかった。当初軍は略奪を認められた。中世さながらに、ラシュタットは3日間にわたって、強盗・略奪を耐え忍んだ。ようやくその後生活が「こういう事情においてそう言ってよければ」正常化し始めた。へトへトになって、ヴェヒター一家はライン通り11番の家に戻った。しかし全体として、まだ満足できる状況だった。間もなくリリー・ヴェヒターは、昔の気質を回復できた。そしてグステルは郡行政のポストを得た。

ナチズムと戦争を乗り越えた喜びは、この時期の日常生活の心配の陰に隠れてしまった。そしてこの心配は、後年回顧すると些細に見えるとは言え、当時は決して小さくなかった。食料は、最後の1グラムまで残らず配給された。それは、どんなに主婦がやりくりしても、定められた日数には足らなかった。さらに「闇」で何か調達するのも、簡単ではなかった。それはともかく、グステルは官吏の地位にあった。あらゆる制約が洗い流されたようなまさにこの時期、このことを考慮しなければならぬとリリー・ヴェヒターは思った。

皆が皆そう考えたわけではない。間もなく、田舎へ「関係」を利用して、自分と家族に割り当てられた僅かばかりの配給を改善しただけでなく、一般的な困窮から活力あるビジネスを作り出した者たちが、評判になった。月々バター500グラムの価格にほとんど達しない給料で働くのは馬鹿馬鹿しい。とにかく自分が一番だ。

そして、あの「時代の兆候」を一番わかっていると思っている者、要領のよい者の中に、終戦直前でもなおフリードリヒ大王を引き合いに出して、「よい」結末を予言していた連中がいた。フーバー、バーダーといった以前の党のボスたちだ。「政治的前科がある」ため、彼らは一般的規定により「下位の労働」しか許されなかった。だが、それをする用意があるという前に、彼らは全然何もしようとせず、言葉の最もプリミティブな意味で「闇取引」した。肉・バター・ジャガイモ、すべてが彼らの手を通り、見事な値段で売られた。連中と連中の家族は、崩壊に続く困窮など何も感じなかった。

「この連中は本当に罰せられないままなの？グステル、〈向こう〉でも彼らをこんなふうには腫れ物に触れるように扱っていると思う？」

〈向こう〉でリリー・ヴェヒターが意味したのは、ドイツのソ連占領地区だ。グステルは肩をすくめて「何て質問をするんだ」。

だが、それはフーバーやバーダーにはあまり関係なかった。彼らの今の「職業」は、多くの人との繋がりを生んで、そこからすごいことになった。我々の誰が、そもそも強制収容所が存在したことをちょっとでもわかっていただろうか？ ダッハウやブーヘンヴァルトについて言われていたことを、全部信じていたか？ いったい「彼ら」は何をしているのだ？ 「彼ら」とは占領軍のことだ。彼らは我々を飢え死にさせようとしている。まして「東」はさらに恐ろしい。「ヘーバーライン嬢のことだが、彼女には叔母さんがいて、その甥の友人は、30日かけて徒歩でライプツィヒからカールスルーエにやって来た。彼がす

ごい話をした。怖くて鳥肌の立つようなことを。要するに、アドルフ・ヒトラーの下で多くの不正があったことは認めねばならないが、一本音を言えば一正しいこともあったではないか？ 西側連合国が彼の言うことを聞いていれば、随分違っていたはずなのに。」

ゼルビンガー夫人が頷いた。「フーバーさん、まったくそのとおりのよ。代用コーヒーをあと250グラムくれませんか、300マルクで...」

「こんなことをもう一度味わうくらいなら、乾いたパンを一生食べている方がいい」という誓いは、もう忘れられていた。

だが、リリー・ヴェヒターは忘れられなかった。

母、継父、異父弟について詳しい情報を得る努力がようやく報われたのは、秋からもう冬の頃だった。両親とテレージエンシュタットにいて、彼らがどうなったのか情報を提供できる人を探すのに、彼女はどんな苦勞も厭わなかった。無数の手紙を書き、可能性のある組織にたくさんの照会を送った。今ようやく回答が...。だがそれはどんなものだったのか？ 継父は1942年夏、「衰弱」死した。要するに餓死だ。リリー・ヴェヒターは歯を食いしばった。母はその直後、アウシュヴィッツ絶滅収容所への移送に振り分けられた。さらに間もなく、異父弟が1939年、ブーヘンヴァルト強制収容所で親衛隊から殴り殺されたという確かな情報も届いたのである。

数週間、数か月間と、リリー・ヴェヒターは硬直したように辺りをさ迷い歩いた。夫以外、彼女は家族を完全に失ってしまった。「なぜこんなことが起こったのか？ なぜみな犠牲とならなければならなかったのか？ このおぞましい出来事の意味は何か？」という問いが絶え間なく突き刺さった。知人・友人・同僚の答えはさまざまだった。

「ヒトラーがポーランドを攻撃さえしなければ、あるいはポーランドは攻撃しても、せめてソ連の手前で留まっていれば...。ブリューニングは弱体すぎたので、もっと彼に抵抗すべきだった。「好々爺の」ヒンデンブルクさえ欺いたのだから。わかっていたら、彼は許さなかつたらうに...。」

ある時リリー・ヴェヒターは得心した。「これらの答えはどれも表面的だ。ブリューニングが何だって？ ヒンデンブルクが何だって？ 我々一人一人に責任がある！ 誰もが！ ヤーと言ってしまったり、ナインとはっきり言わなかったから！」友人たちは肩をすくめて「個々人に何ができる？ 今も昔も何もないさ！」

するとある友人が、フーバーとボーダーは、崩壊の数日前でさえ、怯えている住民に勝利を吹聴した古参ナチだとフランス軍司令官に告げて、彼らに注意を向けさせたという報告をした。成功しただろうか？ フランス軍司令官は、理解できないとブツブツ言った。通訳—これもナチだ—は後で、司令官には、アウシュヴィッツ・マウトハウゼン・ダッハウ・ブーヘンヴァルトで絶滅を免れ、あちこちで再び登場している忌々しい共産主義者よりナチの方がよかったと話したそうだ。そんな態度はぞっとするし、まるで理解できないとリリー・ヴェヒターは言葉を挟んだ。「ヒトラーやその徒党へのいわゆる権力移譲の日から積極的に抵抗したのが共産主義者だったことは忘れてはいけないわ。」

「私たちの同志の多くが、何年もナチ強制収容所に繋がれていたことを忘れないでください、ヴェヒターさん」と、ラシュタットでもオルグを再開したSPDの友人が応じた。

「でも私が思うに、私たちと共産黨員は一緒になって、一緒に闘うべきです。もしそれが1933年以前に実現していたら、ブリューニングはあれほど諾々と無力だったり、ヒン

デンプルクがあれば「善意」でなかったろうし、ドイツはヒトラーを経験しなかったでしょう。決して！」まさに興奮して彼女は話した。余裕たっぷりに SPD の同志が笑った。「状況が変わったんです、ヴェヒター同志。西側の私たちにとって、真の民主主義の基礎を築くことが重要なのです。その際共産主義者との協力は、私たち社会民主主義者にとって論外なのです。でもそれはもう、あなた自身でわかりますよ。あなたの新しい任務においても。」

「新しい任務？」リリー・ヴェヒターは驚いて、この党の友人からさらなる説明を待った。それは割合早く来た。要するに、SPD の現地指導部は、リリー・ヴェヒターを市議員候補に指名するつもりなのであった。リリー・ヴェヒターは考え込んだ。なぜよりによって自分の妻なのか、グステルは知りたがった。その質問からはちょっとした自慢も窺えたが、同時に彼は、妻がラシュタットの社会で役割を果たすよう指名されたことを歓迎してよいのかどうか疑っているようにも見えた。

そこで党の友人は「不適切ですか？」と反問した。目下男不足で、有権者の6割以上が女性だという否定しがたい事実には配慮しなければならない。「だから私たちは候補者リストに女性を載せなければならないのです」とニヤリとして「ではなぜリリーではダメなのです？ 彼女がここでどんな声望を得ているか、御存知ないようですね。」

だがリリー・ヴェヒターは断った。「私は向いてないと思います。」彼女の迷いを覚まそうとする党の友人たちの努力にもかかわらず、彼女は意見を曲げなかった。活動はしたいと思ったけれど、市議会で党議に縛られた形は嫌だった。マックス広場に樅の木を植えるべきかといったことに何時間も論争して、ようやく結論に達するのだが、その結論も実際の必要性よりも党派的な同盟の必要に基づいているのだ。

「私の仕事はもっと自由でなくちゃ！」 彼女はこの点に固執した。

間もなくその願いは叶えられた。勤労者の困窮をまあまあ防ぐために、ある程度勤労者自身のイニシアティブで、昔の「労働者福祉会」が再建された。リリー・ヴェヒターは、その所長として呼ばれた。事情通の人たちにとってようやく一最初にドイツ分断を決定づけることになる通貨改革より1年以上も前—明らかに開始された政治的な大状況に、リリー・ヴェヒターの眼はまだ厳しくはなかった。そうなるまでにはなお相当な時間が過ぎることになる。リリー・ヴェヒターは、小さなラシュタットから何千マイルも世界半周の旅をするのだ。しかし、既述のように、彼女はまだそこまで行っていない。他方、彼女の指揮下にある「労働者福祉会」が、まさに勤労者自身の直接的イニシアティブでつくられたゆえに、SPD 党员とかドイツ共産党 (KPD) 党员、あるいは無党派ということに関係なく、全勤労住民を把握されるのは、彼女には不自然ではない、それどころかむしろ当然と思われた。この種の統一行動が、言葉の正しい意味で西独の政治発展に鑑みて全く自明ではないことは、リリー・ヴェヒターには—既に述べたように—この時点では明らかではなかった。だが活動を通じて、勤労者層を支配するほとんどすべての窮乏が戦争の直接的帰結であることは、彼女にはすぐに明らかになった。1939 年から 45 年までの期間、一人の家族も欠けなかった家庭はほとんどなかった。一家の大黒柱である夫がスターリングラードで戦死した事例もあれば、母親を養っていた息子がエジプトのエル・アラメインに残っている事例もあった。本当に僅かな貯金があっても、破滅的な価値下落で無に等しくなった。そして仕事も無きに等しかった。

米国が大仰な言葉で告知した再建とは、いったいどこの話か？ 工場主は、操業再開を始められる合言葉を待っているように見えた。だが、明らかにその合言葉はまだなかった。ほとんどどの工場主も、やろうと思えばできたのに、やろうとしなかった。

それに加えて、移住民の果てしない困窮。仮設住宅に詰め込まれ、好きなようにさせておかれた。どの官庁も、ドイツだろうが連合国だろうが、この困窮状況を体系的に排除しようと考えなかった。

まるで何か（いわば秘密の）目的のために取っておくために、彼らは意識的にこのひどい状況に置かれているのかと、リリー・ヴェヒターは思ったが、それが核心をついているとは考えなかった。彼女は、「労働者福祉会」に援助を求める人たちと話をした。

「我々の誰もが責任を負っている、誰もが？」と、彼女は一度抱いた考えを繰り返した。「それは間接的にしか当たっていない」と、年老いた労働者がある時彼女に語った。「戦争の責任があるのは、戦争で儲けたくて戦争を始めた連中さ。軍需企業家、コンツェルン主、帝国主義者だ。だが、戦争を防ぐために何もしなかったのなら、我々にも皆責任がある。」

当時リリー・ヴェヒターには、この注釈が全く理解不能に思われた。彼女は自分の仕事の中身を、戦争とナチズムがもたらした窮乏を取り除くことだけと考えていた。この窮乏の克服ができるのは根本においてだということにはわからなかった。当時はまだわからなかったのだ。

1948年6月21日、西独駐留の西側3連合国の指令により、通貨改革が実行された。10ライヒスマルクに代わって、1「ドイツマルク」が登場した。当初、一般的な経済状況の正常化に必要な条件がつけられたことに、人々は満足した。「やっと闇商売は終わりだ。」「そうね」とリリー・ヴェヒターは、夫の言葉に同意したが、「でも...」

「でも、ということが何かあるかい？」とグステルは知りたがった。リリー・ヴェヒターは、「ええ、この通貨改革はすべて素晴らしいわ。でも、なぜドイツ全体に行われなかったのかしら？ 2つの異なった通貨はきっと最終的には、ドイツの二つの部分から二つの異なった国にしてしまうわ。ポツダム議定書では、ドイツは一つの単位と定められていたじゃない。どうしてアメリカ人は西ドイツだけに分離した通貨を導入できたのかしら？ 私にはわからない。」

グステル・ヴェヒターにも、それはわからなかった。「でも、それじゃあどうすればいいのさ」と彼は肩をすくめた。「我々が考え、アメリカ人が指導するのさ。」

実際彼らは実にひたむきに指導した。間もなくヴェヒター夫妻には、フーパーやバーダーら、かつての党のボスたちがもう、本当に闇市で食料品の闇商売をしていないことが明らかになった。通貨改革で経済状況が好転したからではない、断じて。そうではなくて、彼らには新しい仕事があったのだ。静かに目立たず、古参ナチは皆、昔の地位に戻ったのだ。最初はまだどこでも控え目に、彼らは誰に対しても、自分たちは1933年既に常に反対だったと強調した。非ナチ化—彼らは仲間内で「洗剤証明」とあざけていたが—の障害にならない証言、確たる証言を通して、それを証明できただろうに。

しかし彼らは次第に謙虚さを失った。信じられない驚きでそれを確認したのは、リリー・ヴェヒターだけではない。

「いつも言いませんでしたっけ？ ソ連と仲良くしたのは、アメリカの最大の失敗だった。ほら見てごらん。まあ、我々の手が必要になるさ。」

殺戮が終わって4年経つか経たないうちに、戦争のことを考える人間がドイツにいるなんて、理解できるだろうか？

「迫りくる戦争を防ぐために、あらゆる平和愛好者の力が必要だ！」 「労働者福祉会」の事務所で老労働者が彼女に語った言葉が、繰り返し彼女の脳裏を駆け巡った。



写真：リリー・ヴェヒターと語る
エリ・シュミット DFD 第一議長

ドイツ民主女性連盟（DFD）での活動

「私たちは皆、迫りくる戦争の勃発を防ぐために全力を尽くさなければなりません。先の戦争で父・夫・息子を失った私たち女性にこそ、平和を守る神聖な義務があります。」リリー・ヴェヒターは、報告者の言葉を一言も聞き逃さなかった。

偶然彼女は、DFDの集会に出た。ほとんど考えなしに、彼女はある知人の要請に従った。「ちょっと聞きに来て、リリー。あなたは、公的な生活に関心があるのだから。」

リリー・ヴェヒターは、講演した女性の述べたことに耳を傾けただけでなく、感激した。「実際にもうそこまで来ているの？ 新たな戦争の危険は、本当に人類の目前にあるの？」

この講演はリリー・ヴェヒターにとって、簡潔に過ぎた。彼女はもっと知りたいと思ったし、そうせねばならなかった。講演後レストランの奥まった部屋で、少ない人数で席に着いた。リリー・ヴェヒターの差し迫った質問への応答が行われた。さらにその後、二人はライン通り11番の家の前をうろついた。そこでリリー・ヴェヒターは、DFDの目標や任務について、さらに説明を受けた。既に1947年3月にベルリンの国立歌劇場で、第1回平和・民主ドイツ女性会議が開かれた際にDFDが設立されたと知り、彼女は非常に驚いた。世界観や所属政党に関係なく、この団体はすべての女性をまとめ、平和とドイツ統一のための闘いに結集するというのである。

これにより、社会主義の女性がブルジョワ政党や無党派の女性と、平和・民主・統一ドイツの闘いで一緒になる可能性が初めて生まれた。

「なぜそうした組織が西側にはないのかしら？」とリリー・ヴェヒターは問うた。

「西側連合国が許可しないからよ」というのが、簡にしてきまり悪い答えだった。「女性たちが集まって、第1回女性会議のように、当時モスクワで開かれていた外相会談に向け

て、ポツダム決議の履行を求める緊急アピールを発表するのは、彼らの政策には合わないの。DFDが550万人の署名を集めて核兵器の禁止を求めたこともね。」

「でも今西側でもそうした女性団体を作れるようになったのではないかしら」とリリー・ヴェヒターはまた尋ねた。

「ええ、でもアメリカ軍政府がドイツ統一や原爆禁止、そもそも平和の維持について意見を変えたからではないわ。正反対よ！ アメリカは今、兵士連盟や軍人団体、扇動的な移住民団体に強い関心を持っているので、新しい団体の設立に彼らの許可が必要だという規定を廃止したのよ。この状況を、平和の維持とドイツ統一の創出以外望まない私たち女性も利用して、この目標のために活動できる組織の枠組みを作ったのよ。」

それ以上の情報は、リリー・ヴェヒターに必要ななかった。彼女はDFDに加入し、そのエネルギーを注いだ。

ますます切迫する西独の状況に対し、DFDの活動は集中していった。西独の至る所で催された集まりで、米国演出によるアデナウアー政府の戦争政策により全ドイツ人民に迫りくる死の危険について、女性たちへの啓蒙が行われた。リリー・ヴェヒターは繰り返し聴衆に、空襲の夜に恐らく誰もが語り合うか、少なくとも思った言葉「もう一度この地獄を味わうより、一生乾いたパンを食べていた方がいい」を思い起こさせた。

聴衆の好意的な反応は、彼女を楽天的にした。何千何万という女性のゆるぎない平和の意志に対して、アデナウアー政府は何ができるだろうと考えた。だがある友人がその誤りを正した。「最後の最後の人を説得するまで、手を緩めたり労を惜しんだりしてはダメ。いつも戦争は少数の人間によって引き起こされるということを忘れないでね。」リリー・ヴェヒターは再び、ラシュタットの「労働者福祉会」で年老いた労働者が言ったことを耳にしたのだ。「戦争が儲かる商売である数少ない人間がもう一度戦争を起こせないように、皆、全国民が反対しなければならない。」

ナチス崩壊から5年経つか経たないうちに、世界で殺戮が再び始まった。朝鮮戦争だ。DFDでの活動を通じて、リリー・ヴェヒターの眼差しは、もはや故郷ラシュタット、あるいはドイツを越えた。彼女は、世界政治の関係を認識し始め、平和が不可分であることがわかった。全世界に平和が確保されなければ、全世界が戦争の危機に晒されるのである。

朝鮮への旅

1951年2月、ベルリンでの国際民主女性連盟の会合で、北朝鮮の文化相が、米軍やいわゆる国連軍による女性・子ども・老人に対する無差別殺戮についてショッキングな報告を行った。国際民主女性連盟は、朝鮮の状況を調査するために朝鮮に代表団を派遣するよう求められた。

国際民主女性連盟の理事会決議により、1951年5月、17か国21名の朝鮮調査団が派遣された。

昔華やかだった町々

一行の車は、中国との国境沿いの最初の北朝鮮の都市、新義州にゆっくりと入った。車は、一面の巨大な廃墟を苦労しながらかきわけて行った。これが、戦争前は人口12万6000人の都市だったのか...！ リリー・ヴェヒターは衝撃を受けながら、かつての市場広場に

立った。ここでは全部、本当に全部破壊されていた。朝鮮人の官庁代表が報告した。

「ここには何の軍需産業もありませんでした。でも、アメリカ人は何のためらいもなく、空爆によってこの町をほとんど完全に灰燼に帰せてしまったのです。何千何万の女性・子どもたちが、この容赦ない空爆で殺されました。」

他の代議員たちがまだこの報告者の周囲を取り囲んでいる間、リリー・ヴェヒターはゆっくりと、廃墟を片付けた狭い道に沿って歩いた。それはかつて、この町の中心街であった。廃墟の山の前で彼女は立ち尽くした。彼女は自分の目が信じられなかった。残骸を集め、持ってきた角材で支えた洞穴の中に、一人の女性と何人もの幼児を見たのだ。戦争ですべて奪われた人々は、こんな暮らしをしている！ リリー・ヴェヒターは洞穴—この寝泊りする場所は、こうとしか呼びようがない—に入った。一人の朝鮮人通訳が、もう彼女の傍らにいた。ここに棲む—住むとはとても言えない—のは権文秀さん一家で、両親と子ども3人だった。洞穴は、部屋といわゆる台所の二つに分かれていた。リリー・ヴェヒターは、この困窮にぞっとした。しかも通訳からは、この家族は少なくとも風雨から守られているので、隣人たちからまだ幸運だとみられていると聞かされた。

だが、旅はまだまだ続いた。この先 300km の目的地は平壤、朝鮮民主主義人民共和国の首都だ。この 300km の全行程で、町や村が空爆で破壊されていた。

戦前の平壤は、人口約 40 万の華やかな町だった。そこには歌劇場、9 つの劇場、20 の映画館、戦後に建設され近代的な設備の大学、75 の小学校、20 の中学校、5 つの研究所、4 つの高校、大規模な総合病院があった。訪問団のメンバーは到着して、この町が今やがれきの山でしかないことを確認し狼狽した。大半の建物は、地面と同じ高さになった。そこここに破壊された建築物の塀の残骸が、灰と瓦礫の中にまだ立っていた。

アメリカは、この町を占領した後、再び明け渡さざるを得なくなると、まだ居住可能だった建物を系統的に破壊した。彼らは市電に火をつけ、水道管を破壊した。おびただしい空爆の間、低空飛行の米軍機が機関銃で民間人を撃ち殺した。

リリー・ヴェヒターは、廃墟の海の間近で、踏みにじられた大地から新しい生活を生み出そうと、幾人もの手がもう再び動いているのを見て非常に驚いた。農民たちは畑を耕すところだった。興味を持った代議員たち—その中にリリー・ヴェヒターもいたが—は近づいて、農民の一人と言葉を交わそうとした。その瞬間、空にエンジンの音が轟いた。農民たちは本能的にすぐさま地面に伏せ、顔を畝間に押し付けた。荒れた手がリリー・ヴェヒターを溝に引き倒した。彼女は一緒に身をかがめて、このゾッとする劇の証人となった。平和的生活の芽生えでさえ、アメリカは妨害なしには済ませなかった。彼らは機関銃の一斉射撃で、耕作を不可能にしようとした。それも、前線から数百キロ遠く、いかなる軍事施設からも離れていた場所の話である。

後に代表団は、非常に正確な調査を行った。何百もの証言を得、報告は直ちに文書にされた。何人もの女性・母親が、深い悲しみをたたえ、苦痛にほとんど硬直して、夫や子供の運命を報告した。彼女たち庶民の口から、彼女たちが耐え忍ばねばならなかった苦悩と悲慘が、繰り返しほとばしり出た。代表団の一行は、どうしてこんなことが可能なのか、どうしたら人間はこれほど残酷になれるのかという絶望的な質問を繰り返し耳にした。

傍らで物静かな、ほとんど公式的と呼べるタイプの官庁代表が、朝鮮でアメリカとその従僕が始めた破廉恥な行為の証拠に次ぐ証拠を代表団に示した。

中でも、新しい、未知の絶滅兵器を使った証拠が代表団に示された。それは、いわゆるナパーム弾で、地面に達したり、家屋に触れると開き、爆発することなく、くっついて離れず、陽光に当たると燃えだし、家を丸ごと焼く能力があるのである。

「アメリカ人は野獣だ」

アメリカがもたらした平壤住民の苦難は、類例のないものだった。姜福善嬢は、代表団による聞き取りの際、アメリカ人が、歌劇場と近隣の家を米軍用の売春宿にしたと証言した。そこに、路上で捕まった女性や娘たちが皆力づくで連れてこられたというのだ。

37歳で4人の子どもの母親の金性玉さんは、家が破壊された後、善山里村に疎開したと述べた。そこで彼女は、米軍に殺された37人の遺体を見た。その中には、地元女性組織の書記もいた。彼女は裸で路上を引きずり回され、真っ赤に焼けた鉄を膣に突っ込まれて殺された。彼女の幼い男の子は、生き埋めにされた。

1万9092人の住民が韓国軍・英軍・米軍に殺された安岳の町で、代表団は、農業銀行と提携した古い店を見学した。これは米軍が牢屋に改造したもので、それぞれ長さ約4m、幅3mの5つの房に分けられていた。崇山里194番地の農婦韓洛善さんは宣誓して、1950年11月10日、夫・義兄とともに逮捕され、この非常監獄に入れられたと証言した。彼女自身は脱出し、身を隠すことに成功した。彼女は、夫や義兄、それに他の囚人も、彼らは労働者や農民で、公職についていたり、労働党员だった者は一人もいなかったと説明した。多くの子ども一なかには2歳になったばかりの子もいた一が母親と牢屋に投げ込まれた。1950年11月25日、女性・子どもを含む囚人が山に連れて行かれ、壕の中に生きてまま投げ込まれ埋められた。

世山里172番地の金相延さんは、妻、子ども、義理の娘、その12歳の子どもを含む家族12人全員が捕まったと述べた。最初彼は、彼らがどうなったのかわからなかったが、後に彼らの死を知った。町が解放された後、彼は死体を捜し、発掘の際息子と嫁の体が縄で結び付けられたのを発見した。どの死体にも傷がないため、彼は、彼らが生き埋めにされたのだろうと思っている。

上内里187番地の崔応福さんは、夫と子供たちが捕まり、後に殺されたと証言した。

9歳の朴燦以は、父親が殺されたとやった。母子は捕まって、牢屋に入れられた。彼らは処刑されると伝えられたが、処刑直前に朝鮮人民軍によって解放された。母親は、何らかの供述をするよう求められたが、何の陳述もできないと拷問された。焼けた針を爪の下に押し付けられた。その痕は今でも確認できる。拷問に引きずり出された際、彼女は、離れの建物の井戸に人々が生きてまま投げ込まれるのを見たと続けた。そして「アメリカ人は野獣だ！」と叫んだ。

安岳から8km離れた禹世里村出身の沈同敏さんは、アメリカ人が夫と、義理の両親、義理の姉を殺害したと述べた。鉄の棒で殴り、まだ生きている兆候があったので、銃剣で切り刻んだという。義理の父は生き埋めにされた。

孔朱村出身の柳東子さんは、彼女の県で3万5000人の民間人が殺されたと報告した。彼女は、米軍が退却する際、住民と一緒に来るようにさせた。北朝鮮に原爆を落とし、何もかも破壊するという脅しによってである。そこで民間人が村を離れ、南に赴こうとすると、米軍機によって機関銃で撃ち殺されたのである。

冊書里 3 番地に住む 30 歳の李知恵さんは、庭師だった夫が米軍に捕まったと述べた。拘束する際米軍は通訳を通じて、北朝鮮人は残らず殺すと言った。同じ通りに住む 100 家族のうち、90 家族が殺害された。彼女自身は子ども 2 人とともに捕まったが、逃げることができた。捕まった時彼女は、北朝鮮の戦争捕虜が米軍にガソリンをかけられ、生きたまま焼かれるのを見た。

写三里村出身の金淑先さんは、彼女の子どもたちが捕まり殺されたと証言した。夫も殺害された。幼稚園の先生になりたかった 20 歳の娘、金春子さんは、耳に釘を打たれ、背中に太鼓を括りつけられ、裸で路上を引き回された。それから牢屋に投げ込まれ、暴行されるのに抵抗すると銃剣で殺された。母親は後に、体が二つに切断された娘の死体を発見した。

上倉里村出身で 15 歳の黄益水さんは、彼女の家族の 7 人が米軍に殺されたと伝えた。彼女自身は、父親が活動家だという理由で逮捕された。母親と兄と一緒に牢屋に連れて行かれ、虐待された。足への殴打の痕が、まだはっきり見て取れた。家族はガソリンをかけられた。火をつけられる直前、パルチザンに解放された。ただ一人の兄は、首に縄をかけて連れてゆかれ、5 人の家族とともに生き埋めにされた。

代表団の一部は、1951 年 5 月 22～23 日、平壤内の町である南浦と江西市を訪問した。南浦は 1950 年 10 月 22 日～12 月 5 日、米軍に占領された。それまでに町の大半は破壊されていた。占領期間中、1112 人の民間人—その半数は女性や子どもだった—が米軍に殺害された。

46 歳のプロテスタント牧師である許良郁さんは、南浦には 4500 人のクリスチャンがいたと証言した。その大半は米軍の宣伝に騙されて、船で人民軍の部隊から逃げようと港に集まった。12 月 5 日、1500 人が乗船しようとしたところ、米軍機から機関銃で撃たれた。最初間違っているとされたため、彼らはコラール（讚美歌）を歌い始めた。それでも米軍は射撃を続け、合計 275 人が命を失った。

信川面では、10 月 20 日～11 月〔国際女性調査団報告書によれば 12 月〕7 日の米軍占領中、1561 人の民間人が殺された。1384 人が射殺されたが、このうち 452 人が女性、354 人が 8 歳までの子どもだった。57 人—うち女性は 15 人—が縛り首にされた。50 人—うち女性は 20 人—が生き埋めにされ、35 人—うち女性は 10 人—が殴り殺され、35 人—うち女性は 3 人—は焼き殺された。米軍が拷問し殺害するには、農民連盟か他の民主的組織—単なる消費組合であろうが—のメンバーであるか、この組織に親戚がいるかで十分であった。

58 歳の金基順さんは、息子、嫁、それに孫が米軍に生き埋めにされたと証言した。米軍撤退後掘り出してみると、彼らが両手を縛られていたことを確認した。

玉洞里村（平康地区）では、農夫の呂東朝氏の 23 歳の嫁が、8 か月の身重なのに米軍に連行され、服を脱がされ、この状態で村の市場広場で晒し者にされ、終いに両手を木に吊るされた。美延里村（安道郡、安辺地区〔安辺郡安道面の誤記と思われる〕）では、農夫の呂良先さん一家の 3 人の女性が隠れ家に連れていかれた。暴行しようとしたアメリカ人に抵抗すると、彼女たちは胸を切り落とされ、赤く燃えた鉄を膣に突っ込んで殺された。

49 歳のプロテスタント伝道師である全権花さんは代表団に、彼女の 25 歳の嫁が夜襲われ、2 人の売春婦と一緒に車に投げ込まれたと報告した。彼女は田んぼに逃げることに成

功したが、米兵に追跡され、暴行・射殺された。

元山の景山里に住む46歳の農婦の申英玉さんは、妊娠9か月の25歳の嫁が、1950年11月18日、「アカ」という理由で米兵に殴打されたと伝えた。5日後彼女は、広場で晒し者にされた。誕生直前の子どもは、臍に棒を突込まれたために死亡した。

1950年10月21日に米第26・27師団に占領された朝鮮北部の价川では、地域委員長の金炳午さんが、「李和実さんは米軍に捕まって、パルチザンに加わっていた夫の居場所を尋ねられました。彼女がどんな供述も拒むと、拷問されました。まず左腕を切り落とし、次に右足です。彼女の死後、4人の子供たちは家に閉じ込められ、生きながら焼かれました」と報告した。

价川の馬場里20番地に住む李真賢さんは、政府から優良農民として表彰された末娘が、郡の民主女性連盟の公職に就いていたと証言した。米軍による占領以前、李真賢さんは娘に、一緒に逃げるよう迫った。しかし娘は自分の職を考え、できる限り長くとどまろうとした。李さんは子どもたちと逃げた。米軍が撤退して直後、李さんは、8歳の息子と一緒に、非常に心配しながら娘を探しに出かけた。彼女は、衣服をまもっていない娘の死体が木に括りつけられているのを見つけた。娘は、夫の活動や女性組織での地震の活動のせいで、米軍から電気で拷問されたと隣人が語ってくれた。8歳の男の子が怒りのあまり兵士めがけて飛びかかったが、殴り倒された。娘は何日間も、凌辱に立ち会うよう強要された住民の目前で拷問された。結局彼女は殺された。

代表団が訪れた江界市には、戦争勃発以前4万人が住んでいて、教員養成所が2校、林業大学が1校、女子中学校が1校、高校が2校、小学校が4校、劇場が2つあった。これらの建物のうち、まだ立っているのは、破損した高校1校だけだ。屋上に赤十字が掲げられていたにもかかわらず、中央病院は破壊された。町にはほかにプロテスタント教会が2つ、カトリック教会が1つ、儒教の寺が1つ、それに天道教の教会が1つあった。

朝鮮滞在最後の数日、代表団は再び平壤の近くに集まり、自分たちの体験や検証を報告書にまとめた。その結論は以下のとおりである。

「朝鮮の様々な地域で代表団が監視を行った結果、委員会は以下の結論に達した。

朝鮮人民は米軍により、無慈悲で組織的な絶滅戦の下に置かれた。その過程では、人道の諸原則だけでなく、ハーグ陸戦条約やジュネーブ条約に定式化された戦争法規が、以下の方法で恒常的に侵害された。

a) 食料・食料備蓄・食品工場の体系的破壊によって、森林・田畑は体系的に焼夷弾で焼かれ、果樹は破壊され、田畑で役畜と働いていた農民は、空からの機銃掃射で殺された。

b) 軍事施設でないどころか産業の中心でもない都市・農村の体系的な破壊によって。これらの破壊行為の目的は、明らかに人民の士気阻喪と物理的絶滅である。絶え間ない空爆の間、住宅・病院・学校などが意図的に破壊され、既に灰燼に帰し、住民が洞穴に住まなければならない都市ですら、再度空爆された。

c) 焼夷弾・石油爆弾・ナパーム弾・時限爆弾など、国際的な取り決めで禁止されている民間人への体系的な武力行使や、低空飛行からの機銃掃射による民間人射撃によって。

d) 大量の朝鮮住民の体系的根絶によって。米軍、英軍、李承晩軍に暫時占領された地域では、何十万人もの民間人、老人から子どもに至る幾つもの全家族が、死ぬまで拷問され、

生きながら焼かれ、撲殺され、生き埋めにされた。たくさんの人が牢屋の中で、飢餓と寒さで破滅した。彼らは、起訴も判決もないまま牢屋に投げ込まれた。そうした拷問と大量殺戮は、ナチスが占領した欧州で行われた犯罪に匹敵する、それどころかそれを上回りすらする。

尋問を受けた民間人の証言は、これらの犯罪の圧倒的多数が米軍の将兵によって、あるいは命令に基づいて犯されたことを証明している。したがって、これらの犯罪の責任は完全に、在韓米軍の司令官たち、マッカーサー将軍、リッジウェイ将軍、その他、自称国連軍という侵略軍の司令官にある。これらの行為が、将軍たちの命令で行われたにもかかわらず、その責任は、朝鮮に軍隊を送った諸政府、国連で朝鮮戦争に賛成した諸政府に帰する。

委員会は、朝鮮人民に行われた犯罪の責任者たちが、1943年の連合国の宣言に盛り込まれた「戦争犯罪」の定義に照らして訴追され、この宣言で予定されているように、諸民族によって判決を下されねばならないという確信を表明する。

委員会は、人道の名において、世界の全民族に、あらゆる手段を用いて、戦争の即時停止と朝鮮からの外国軍隊の撤退を求めよう呼びかける。委員会はまた全民族に、米侵略軍が犯罪を行った結果、飢餓と病気が切迫している朝鮮人民のために、救援活動を組織するよう呼びかける。

委員会は国際民主女性連盟に、この文書を世界の全政府、全女性団体—国際民主女性連盟の加盟団体であろうがなかろうが一、世界平和評議会、平和のために闘っているすべての団体、すべての人道団体、世界平和に取り組んでいるすべての公人—その政治的・宗教的立場には関係なく—に送るよう求める。

委員会はまた、国際民主女性連盟が、米軍と李承晩軍が朝鮮で犯した残虐行為に関する国際女性委員会の調査報告書を国連に送ることが不可欠と考える。」

この報告書は国際民主女性連盟書記局に渡り、1951年6月11日、下記の書簡をつけて国連にさらに送られた。

ベルリン、1951年6月11日

国際民主女性連盟評議会は、1951年2月1～5日、ベルリンにおける会議で、米軍の空爆で引き起こされた破壊と、民間人—特に女性と子ども—に行われた残虐行為を確定するために、国際的な女性委員会を朝鮮に派遣することを決議した。

ヨーロッパ・アメリカ・アフリカ・アジア 17 か国の代議員が、委員会に参加した。12 日間の綿密な調査を経て、委員会は、国際民主女性連盟書記局に文書を渡した。それが今般送付したもので、表題は「朝鮮における米軍および李承晩の傭兵の残虐行為に関する国際女性委員会の調査報告書」である。

国際民主女性連盟に加盟する 9100 万女性の名において、国際民主女性連盟は、この報告書が国連の当該諸機関に提出され、国連が一委員会が定式化した決議に即して—決定を下すことを要求する。

国際民主女性連盟はさらに、平和的な朝鮮住民に行われた犯罪の責任者を「戦争犯罪人」として提訴し、1943年の連合国の声明に則って、諸民族が判決を下すことを要求する。

朝鮮における残虐行為を終わらせるために、国際民主女性連盟は国連に対し、

朝鮮の町村および朝鮮住民へのあらゆる空爆の即時停止

朝鮮問題の平和的解決と朝鮮からのあらゆる外国軍隊の撤退

自民族および国の問題に関する朝鮮人の単独自決権を要求する。

国際民主女性連盟は、朝鮮委員会の報告書が、国連の公式文書の中で公表され、国連組織に加盟する諸国の全代表に手渡されることを要求する。

ユージェニー・コットン (署名)

国際民主女性連盟議長

私でなければ誰が？

1951年6月半ば、リリー・ヴェヒターはドイツに戻った。彼女は、朝鮮で見た計りがたい残酷さに精神的打撃を受けていた。残虐行為について代表団に報告した女性たちの苦悩に満ちたまなざしの記憶は、彼女からひと時も離れることがなかった。

彼女が朝鮮に行ったのは無駄ではなかった。これから歩もうとする道が定まったのだ。決してドイツを第二の朝鮮にしてはならない！ 米国とその傭兵によって分断された国における彼らの侵略戦争のあらゆる悲惨を自分の目で見たからこそ、じっとしてはいられなかった。ドイツ人の目を開き、いかなる危険が迫っているのかを彼らに示すには、自分が見たことを呼び起こさなければならない。リリー・ヴェヒターは、まだ帰国直後デュッセルドルフでの記者会見で、新聞や放送局の代表を前に、調査委員会によるおぞましい調査結果を報告した。

だがそれだけではなかった。リリー・ヴェヒターが朝鮮戦争の恐怖について報告する集会在組織された。西独当局は、米占領軍の指示を受けて、この集會を妨害するためあらゆることを行った。ラシュタット・デュッセルドルフ・ズィンデルフィンゲン・フリードリヒスハーフェン・ニュルンベルクでは、リリー・ヴェヒターは話すことを禁じられた。この期間、彼女は5回逮捕され、ドイツの女性・母親の抗議で5回釈放された。

1951年6月30日、彼女はSPDからの除名を文書で伝えられた。この措置の理由は書かれていなかった…。社会民主党は、30年間党員だった女性にこのような仕打ちをしたのである。リリー・ヴェヒターは、肩をすくめてこの通知を脇にやった。平和を守る闘いで彼女を感わすものは、もはや何もなくなった！

禁止にもかかわらず、彼女はミュンヘンでもヒュルトでも話すことができた。1951年8月28日、彼女は、ルードヴィヒスブルクでドイツ平和委員会の集會に参加した。会場は平和の鳩で飾られていた。壁に貼った平和維持の警句が、目に飛び込んできた。リリー・ヴェヒターはこの集會で、朝鮮戦争の惨劇について1時間半以上語った。同じことを、8月29日、ハイデルベルクでも行った。

9月6日、彼女は「朝鮮で見たこと」をテーマに、公の集會で話すことになっていた。場所はシュトゥットガルトだった。集會開始1時間前、会場はもう人で溢れ、多くの人が入れなくなった。この集會への途上、リリー・ヴェヒターは、米軍政部の指示でドイツの警察に逮捕され、アメリカ人に引き渡された。

集會の開会に際してリリー・ヴェヒターの逮捕が知らされると、参加者から憤激の嵐が巻き起こった。牢獄のリリー・ヴェヒターに花束を届ける一行が選ばれた。集會は開催され、最後にリリー・ヴェヒターの逮捕に激しく抗議し、即時釈放を求める決議が満場一致で採択された。

後に、リリー・ヴェヒターが収監された牢屋の前で、何千人もの人がデモを行った。シュトゥットガルトですぐに擁護委員会が結成され、翌日ドイツ中から米軍政部に抗議電報が届いた。

9月7日、米国の訴訟手続きにより必要な最初の予備尋問が行われた。既に朝早くから、何百人もの女性たちが裁判所の前に集まっていた。警察は法廷ですら秩序を保つのに一苦労だった。

米国の検事は、ルードヴィヒスブルクとハイデルベルクの集会での演説で、米国の法律第14号を侵害したとして、リリー・ヴェヒターに容疑をかけた。彼は法律の規定を読み上げた。

「反乱または公的騒擾を教唆し、あるいはこれに参加し、あるいは占領当局が禁止した、またはサボタージュ・蜂起・転覆の目的、または連合国の軍隊に不利となる目的で開かれる公的集会を主催、あるいは積極的・消極的に参加した者は、10年以下の自由刑および5万マルク以下の罰金刑に処せられる。」

リリー・ヴェヒターははっきりした声で、いかなる形でも有罪ではないと述べた。米国人裁判官ジョンソンはすぐさま、この問題は最初の予備尋問の際には議論にならないと手短かに述べた。検察による起訴は筋が通っていて、逮捕命令を正当化するという。この告訴の正しさは、規則通りの訴訟手続きにおいてしか検証できないからだそう。

それに対してリリー・ヴェヒターは落ち着いて、この訴訟を恐れる理由がないと述べた。ラシュタットに定住所があるので、彼女は逮捕命令の取り下げを求めた。

ティレラロ検事は激怒して反論した。彼の名前を知らなくとも、彼が南チロルの血統であることは否定できない。彼は、逮捕命令の取り下げに断固反対だと叫んだ。「被告」が米軍に対し敬意のない態度をとったからだけでなく、彼女が占領軍の安全にとって重大な脅威でもあるからだ。彼女の演説の目的は、在独米軍反対の米国世論をつくりたいということにしか見えない。「秩序ある審理が行われるまでは、この女性を通りから連れ去り、牢屋に閉じ込めておかねばならない！」と、彼は小さな尋問室でがなり声を立てた。だがもし保釈金による釈放が問題になるのであれば、保釈金は5万マルクと提案した。少し考えて裁判官は、裁判所の許可なしにラシュタットを離れず、2人以上の集団と話をしないという条件で、逮捕命令の執行は、保釈金1万5000マルクで中止すると告げた。この条件が侵害されれば、1万5000マルクは没収され、逮捕命令は執行されることになる。

それから、次の主審理の日程が9月25日10時と決められた。

もちろんリリー・ヴェヒターは、自分の自由のために1万5000マルクを調達する状況になかった。だが、24時間も経たないうちに、ドイツの女性たちが集めたこの金額が裁判所に届けられた。

前述のSPD除名にもかかわらず、多くのSPD党員が、リリー・ヴェヒターの勾留中彼女への連帯を表明し、その釈放を要求した。

平和愛好世界はリリー・ヴェヒターの背後にいる

この頃全世界、特にドイツで、抗議の嵐が巻き起こった。西ドイツの平和活動家がリリー・ヴェヒターに個人的に送ったおびたしい手紙や集会で、また派遣団を通して、彼らはリリー・ヴェヒターと朝鮮人民の英雄的闘争との連帯を表明した。抗議の嵐は、DDR(東

独)でも起こった。

感動的な手紙で、西ドイツの多くの町で児童たちが、リリー・ヴェヒターが朝鮮に関する真実を述べ、母親たちに、子どもたちが新たな戦争の犠牲にならないよう団結することをよびかけたことに感謝した。子どもたちは、手紙を書いて彼女への敬愛を示したがったのだ。

年金が月わずか 69 マルクの西独ゲルゼンキルヒェン=エルルの老女は、擁護基金に 5 マルク寄付した。デュッセルドルフの別の平和愛好女性は、「平和活動は実践活動」と言って、リリー・ヴェヒターのために商人たちから 20 マルクを集めた。プレーメンの独ソ友好協会の友人たちは、勇敢な平和愛好女性に 78 通の手紙を送った。国際民主女性連盟が何度も国際世論に訴え、リリー・ヴェヒター有罪に反対する闘いを大きく支えたことは、全世界の国々で、ドイツの平和の闘士リリー・ヴェヒターへの連帯が生まれる結果となった。

アルバニア・中国・イギリス・フランス・イタリア・オーストリア・スウェーデン・デンマークから、チェコスロヴァキア・ハンガリー・ヴェトナム・北アフリカ・カナダ・合衆国から、それに朝鮮自体からも、連帯の手紙が擁護委員会に、抗議書が米軍当局に届いた。

トウモヴァ・チェコスロヴァキア女性連盟事務局長は、ジョン・マクロイの宛先にリリー・ヴェヒター有罪反対の抗議書 72 通が、チェコスロヴァキア全国から寄せられたと伝えた。それは、アメリカ占領軍の処置に憤激した主婦や女性労働者の抗議だった。チェコスロヴァキアの市民がリリー・ヴェヒターに示した大きな共感は、どの抗議でも見られた。彼女は、すべての平和愛好者のシンボルとなった。

朝鮮労働組合中央委員会は、以下の文面の電報を送った。

「我々は、西独の米占領軍に以下のことを伝えるよう、諸君にお願いする。我々は、国際民主女性連盟の調査委員会メンバーであるリリー・ヴェヒターが、大衆集会で朝鮮における米軍の残虐行為の調査結果について報告しようとしたところ、米当局によって不法にも軍事法廷に立たされたことに満身の怒りを覚える。

このようなファッショ的措置は、人民の目・耳・口をふさぎ、米帝国主義・米当局のカニバリズムと残忍さを隠すことになる。」

世界中で進歩的新聞がリリー・ヴェヒターの勇敢なふるまいを論評し、同時に、米軍事法廷の不法な処置に抗議した。

国際朝鮮委員会のメンバーは、リリー・ヴェヒターに格別の支援を行った。全員が擁護委員会に加入したのである。

リリー・ヴェヒター擁護委員会は、パリから以下の電報を受け取った。

「私は衷心から、リリー・ヴェヒター擁護委員会への加入を表明する。フランス女性連盟は、米政府への抗議を行った。あらゆる平和愛好組織の行動が、リリー・ヴェヒターを解放するはずだ。

真の友好を表明して

ジレット・ジグレル
Ce Soir 誌

自身も迫害に晒されたことのあるイギリス人委員会メンバー、モニカ・フェルトン博士は、擁護委員会に助力を申し出た。彼女と、ロッド（カナダ）、エヴァ・プリースター（オーストリア）は、自分たちが朝鮮について話をするすべての集会で、リリー・ヴェヒターの裁判についても報告すると書きよこした。ベルギーのヘルマイネ・ハンファートは、「勇気を！ あなたは朝鮮に関する真実を繰り返し話されると確信しています。私たち平和の闘士は、私たちの理想に忠実なままです。平和勢力は戦争勢力に大勝利するでしょう。」

中国のゲン・ミンはリリー・ヴェヒターにこう書いている。



「私たちは憤りをもって、あなたが、国際民主女性連盟朝鮮派遣団の一員で、帰国後この戦争についての真実を述べたという理由で、アメリカ当局の命令で逮捕されたことを聞きました。国際民主女性連盟のユージェニー・コットン議長が、世界平和評議会の会議での演説で、リリー・ヴェヒター裁判について論評され、ドイツの平和の闘士に対する世界の全平和愛好婦人の連帯を表明しました。」

【写真：裁判文書に目を通すリリー・ヴェヒター】

シュトゥットガルトの裁判

米軍事法廷が開かれる満員の小さな部屋でジョンソン裁判官が審理を開始した 9 月 25 日の朝は、雨交じりのどんよりした天気であった。彼はまず米国の裁判形式に則って、起訴によって罪があると感じているかどうかリリー・ヴェヒターに尋ねた。

リリー・ヴェヒターはこの質問に、はっきりと「いいえ」と答えた。

それからティネレロ検事が、証人尋問を始めるよう求められた。最初の証人として、ハイデルベルク、ロートマン通り 12 番地のゲオルク・ルンツが、検事から証人台に呼ばれた。

営庭でのように訓練されて、あからさまな質問に、この証人はこう答えた。

「はい、リリー・ヴェヒターはハイデルベルクの集会で、アメリカ兵が民間人を虐待・拷問したと話しました。……はい、彼女は、もっぱらアメリカがこの残虐行為を犯したと述べました。……はい、彼女の演説は、アメリカ国民に対する敵意でいっぱいでした。」

検事と証人のゲームはよく練習してあって、裁判官が一度、証人は事実を述べるにとどめ、意見や感想は述べないようにと警告するほどであった。

この証人の尋問がおもしろくなったのは、弁護人が反対尋問で証人に質問してからだった。それで明らかになったのは、証人が 1945 年、ソ連占領軍に引き渡され、最近ハイデルベルクに戻ってきたことだ。

検事は慌てて、証人のばつの悪い印象を拭おうとした。「それはこの審理には関係ありません！」と、彼は叫んだ。

彼は、証人の個人的事情を明らかにすることが審理に非常に有意義だということを受け入れざるを得なかった。なぜなら、そこから信頼性を結論づけられたからだ。

弁護人は、証人に集会に参加したきっかけを聞いた。・・・彼は何らかの契約に基づいて行動したのだろうか？

この質問に答える時、証人は不安になり始めた。結局彼は、集会の14日後、裁判所にこれに関する報告書を提出したことを認めた。

この回答は裁判官にとって、ばつが悪い以上のものであった。彼は脅すように質問に割って入り、米国の裁判所では審理の前に一切の声明や報告が提出されることはないと言証人に注意した。

それで証人は修正しなければならなかった。・・・彼は、文書による報告書を求めてきたあるアメリカの事務所にそれを提出したと言った。

そこで弁護人は、証人がすでに頻繁にこの事務所から報告書を作成するよう求められているのか、彼はそれをほとんど職業のようにしているのか知ろうとした。

「証人が一般的に何をしているかは重要ではありません」と、検事が証人を助太刀しようとし、裁判官は、多少ためらいながらも、この質問への検事の異議申し立ては正当だと認めた。

本題についてこのまさに「古典的」証人は、弁護人の質問で窮地に陥って、アメリカ当局から金を貰ったスパイであることを認めざるを得なくなった。彼は、リリー・ヴェヒターが、平和を守る必然性について一人で1時間半喋ったハイデルベルクの集会で、朝鮮での見聞に関して報告するのには20~30分くらいしか使わなかったことを認めた。次の証人についても、同じイメージが浮かび上がった。彼らは皆、検察が聞きたがるような報告をしたのである。

演出は見事にうまく行った。ほとんど、質疑応答が前もって綿密に打ち合わせられていたかのような印象だった。

証人は「リリー・ヴェヒターは朝鮮での体験を報告する冒頭、朝鮮戦争が6月25日ではなく23日にもう始まっていたと言いました」と述べた。

すかさず検事が興味深そうに「どのような形で、それが6月23日に始まったのです？」と割り込んだ。

フィードラー証人はこの質問に、「6月23日、アメリカの戦車・飛行機の支援を受けた韓国軍が、北朝鮮に侵入しました。そして6月25日、韓国側の攻撃を防衛する北朝鮮が、韓国とアメリカの戦車を、国境を越えて撃退し、防衛の中で韓国に進撃したのです」と答えた。続けて「根拠としてヴェヒターさんは、李承晩韓国大統領の往復文書を挙げました。その中でアメリカ側は、蒋介石とアメリカが支援して北朝鮮を襲撃することを提案したのです。」それから証人は、リリー・ヴェヒターの演説全体が、在独米軍を中傷することだけを狙っていたと断言した。

「朝鮮の外の占領軍について、そもそも話があったのですか？」と弁護人が尋ねた。

証人はおずおずと「思い出せません」と言わざるを得なかった。検察が期待したように問答ゲームがうまく行かなくなると、検察は、メルツ証人の場合のように、アメリカの訴

訟法のあらゆる規定を無視した。検察官は宥めるようにこの証人に「メルツさん、ハイデルベルクの集会で何が話されたのか思い出せないのなら、あなたがこの審理でとったメモを、私が質問する際ご覧になってもいいですよ」と話しかけた。

だがここで裁判官が一嫌々だとしても一異議を唱えた。「証人は記憶していることからお話しください。証言の際、メモは使えません。」

記憶があいまいにもかかわらず、結局この証人は検察官が知りたいことをすっかり満足させることに成功した。もっとも彼は、弁護側の質問に、リリー・ヴェヒターが決して聴衆に、在独米軍に不利なことをするよう求めたりはしなかったと認めた。

「私は、ヴェヒターさんの説明は全部、もっぱら朝鮮に関するもので、少しもドイツの状況に結びついていなかった感じがします。」

検察側の証人がどんなものかは、ハイデルベルクのハンス・シュレーダー証人の尋問から非常に明白になった。

弁護人：「シュレーダーさん、あなたは政治的な利益団体のために、リリー・ヴェヒターが喋った集会に行ったのですか？」

証人：「いいえ。」

弁護人：「あなたは自分がヴェヒターさんの政敵だと思われますか？」

証人：「そう言えるでしょう。」

この答えに対して傍聴席を捕えた憤激を、裁判長は、同じことが繰り返されれば傍聴人を退廷させると脅して抑えつけた。

だが既に検察官は飛び上がって、不用意に答えられてしまった質問に、証人の政治的態度はこの審理と何の関係もないと異議を申し立てた。

自分の不用意さの埋め合わせをし、検察に気に入られるつもりで、証人は問わず語りに「この集会への参加を求めるポスターには、〈リリー・ヴェヒターさん、SPD〉と書いてありました。新聞には反対に、ヴェヒターさんが SPD 党員でないと書いてありました。この新聞報道に基づいて私は、ヴェヒターさんがかなりずっと左だと考え、反〈左翼〉の私は当然政敵であるわけです。」

弁護人：「あなたはすでにヴェヒターさんの政敵として、集会を訪れたのですか？」

ここで裁判官が割り込んだ。「本裁判がこれらの質問と何の関係があるかわからない。証人が集会に行った際抱いていた偏見は、とにかく、ここで議論している出来事の判断に無意味だ。」

弁護人は裁判官に、証人が事前に検察官から、ヴェヒターさんの演説にどんな印象を持ったか質問されていたことを教えてやらなければならなかった。この質問に彼は答え、その答えの評価にとって、どんな立場からこの判断をしたのかがとにかく決定的なのだということである。

そこで証人は、検察官と裁判官にとにかくにも気に入られたいとジリジリ思った。「私がこの集会に参加したのは、招待のポスターに、リリー・ヴェヒターさんが SPD 所属と書いてあり、SPD は民主主義政党だからです。だから、政敵としてそこに行ったわけではありません。」

弁護人：「でもあなたは、集会の前に、ヴェヒターさんが SPD 党員でないと新聞で読んだと言いましたね。」

証人：「それは新聞の短いメモにすぎません。私は新聞に書いていることを何でもかんでも信じているわけではありません。」

傍聴席で起こった笑いを、裁判官は気に留めなかった。シュレーダー氏が証言台を離れると、裁判官だけでなく検事もほっと一息ついた。

何時間も何時間も、リリー・ヴェヒターは初日、このやり取りを聞いていなければならなかった。しかも、アメリカの裁判方式に従って、自分が一言も喋ることは許されなかった。

次の審理の日、古いメロディーが続いた。

証人たちは繰り返し、弁護人の質問に対して、リリー・ヴェヒターが在独米軍について一言も語らなかったと認めざるを得なかった。ルードヴィヒスブルクの集会でも、ハイデルベルクの集会でもそうだったのである。

検察側にとって、リリー・ヴェヒターが集会で実際に何を言ったのかを解明するのがあまり重要でないことは、ルードヴィヒスブルクの集会について陳述したイグナス証人の尋問で明らかになった。

弁護人：「ルードヴィヒスブルクの集会では、平和の維持について話が出ましたか？」

証人：（ためらいがちに）「もうわかりません。」

弁護人：「それが肝腎な点だったのではないですか？」

証人：「おそらく最も重要だったでしょう。でも、平和という言葉が口から出たかどうかは、もう覚えていません。」

弁護人：「開会の時に、平和が語られましたか？」

証人：「もう思い出せません。でも、平和という語を含んだ横断幕が取り付けられていました。」

弁護人：「ヴェヒターさんは、朝鮮での惨劇を語ることで、ドイツの平和を守ろうと警告したのではないですか？」

検事が興奮して立ち上がり、この質問に異議を唱えた。裁判官は、弁護人から出された質問が明瞭でないと認めた。

そこで弁護人は質問をこう変えた。「ヴェヒターさんは、朝鮮戦争の描写にかこつけて、はっきりと平和を警告したのではないですか？」

再び検事が、この質問の拒否を求めた。だが今度は裁判官は、そうしたいと思っても、検事の意に沿うことはできなかった。検事の異議申し立ては却下され、証人は、かなりつつかえながら曖昧に説明した。

「ヴェヒターさんは、演説の最初と最後に、そのようなことが世界でもう起ってはならず、だからこそ平和を守らなければならないと言いました。」

弁護人に強く迫られて、証人は、リリー・ヴェヒターが演説の終わりに、ようやく平和が到来し、この恐ろしい戦争が終わるよう、諸国民が結集すべきだと訴えたことを認めざるを得なかった。

次に尋問された証人、ヒュー・ヴァイルは、検事に気に入られたいと徹底的にやった。彼の報告はあらかじめ用意されていた。それだけに、証人が弁護人の質問に対して、自分がアメリカ当局の情報部に雇われていて、「仕事として」—とは彼の表現だが—集会に参加したと認めたのも不思議ではない。もちろん、検察に起訴に必要な資料を調達するための

行為である。

集会の間にとったというメモを示すように弁護人から求められると、彼は決まり悪そうに、もう持っていないと説明せざるを得なかった。

弁護人：「いったいどこにあるのですか？」

証人：「保安上の理由から、どこにあるか言いません。」

弁護人：「私の質問に答えてください！」

すると検事がかばうように証人の前に立った。だが結局証人は、それをアメリカ当局の情報部に渡したことを認めるしかなかった。そこで弁護人は、メモが、証人が裁判で証言したことと一致しているのかどうかを怪しんだ。

即座に検事が立ち上がった。「私はここで短い説明をしなければなりません。ヴェヒターさんが使った正確な言葉が問題であるとするなら、南西放送がリリー・ヴェヒターさんの演説を完全に録音したことを指摘できます。私は、録音テープをこの裁判で証拠として使えることを放送局と決めました。」

次の証人、フリードリヒ・トマンスキも、アメリカに雇われたスパイで、ぬらりくらりと言い抜けようとした。だが、弁護人の質問に、自分が「職業として他の人物と知り合いになることに取り組んでいる」と認めざるを得なかった。

審理3日目の9月27日、ついに弁護人が発言した。

アメリカの起訴代表者は、証人尋問後、自信満々という感じではなかった。なぜなら、突然フランクフルトからマッコリー検事総長が現れ、自分で訴追を指揮しようとしたからだ。弁護人が次のように述べたのも、それだけ正常なように見える。

弁護人であるグレー弁護士は、検察側証人の尋問を通して、起訴が不当になされたことが既に明らかだという立場に立ちます。リリー・ヴェヒターさんは、起訴状を通じて、連合軍占領当局の軍隊への敵対行為のみが非難されています。しかし、検事総長が述べたところでは、被告が何らかの形で在独連合軍を不利にしようとしたことはどこにも認められないのです。

リリー・ヴェヒターは演説で、もっぱら朝鮮での米軍の状況を扱いました。しかし、朝鮮の米軍は、在独米軍と一切関係がないのです。さらに、—おそらくこれが最も有意義だったろうが—検察は証人を通して、リリー・ヴェヒターが全く真実でないことを述べたと証明できませんでした。

したがって、起訴は破綻したのです（と弁護人は強調した）。

しかしもし裁判所が別の見地に立つのであれば、検事自身が証拠として提出したというテープを法廷で流すことにより、リリー・ヴェヒターの演説の正確な文言をまず確定する必要があります。

それにしても、もし弁護側が、ヴェヒターさんの言の正しさを証明する義務があれば、と思います。しかも、彼女と一緒に朝鮮に旅行した代議員だけでなく、氏名・住所を詳しく申し立てられる朝鮮のさまざまな民間人もここで証人として聴取することを通して、です。

検察側の決定的な矛盾の後、裁判官は、明らかに検事総長の出席に強く影響されて、リ

リー・ヴェヒターがハイデルベルクとルードヴィヒスブルクで行った演説の内容が、これまでの証人尋問で明らかであり、テープの再生は必要ないと述べた。真実の証拠に関しては、彼は、リリー・ヴェヒターの主張が正しいかがこの裁判で争われているわけではないとして、その指揮を拒否した。

次の両公判日で、今度はリリー・ヴェヒターの弁護側の証人が証言することになった。彼らはあらゆる身分の出身だった。技術者、医師、主婦、労働者—彼らは皆、朝鮮で見た残虐行為に関するリリー・ヴェヒターの報告の意味が、ドイツが朝鮮と同じ運命を辿らないよう、平和を守るためにあらゆる手を尽くさなければならないという警告以外の何物でもなかったと証言した。

反対尋問で検事総長が陰險な誘導尋問をしたにもかかわらず、彼らは皆、リリー・ヴェヒターにとって一番嫌なのは憎悪や敵意の種をまくことで、逆に平和の維持を訴えることだけが重要だったという立場を変えなかった。

ルードヴィヒスブルクからの証人、アンナ・クンデは、リリー・ヴェヒターの演説が呼んだ反響を、偽りない論評で次のようにまとめた。「私たちはその後議論をし、これまで起こったこと全てにきっぱりけりをつけ、第三次〔世界〕戦争の悲慘が人類に及ばないよう全力を尽くさねばならないという点で一致しました。」

証拠調べの最後に、弁護人は、ルードヴィヒスブルクで録音されたテープを、リリー・ヴェヒターの演説内容の証拠物件として裁判所が聴取する申請を繰り返した。

「私は既に最初に、この案件で真実であるかどうかは議論にならないと言いました。その種の調査に関わりたいのなら、証人が登場可能になるまで、私たちはここに何か月も何年も座っていなければならないでしょう。それから、検察当局が反対証人を呼んで、弁護側証人に反証しようとするわけです。言ったように、この裁判で、真実か真実でないかは議論にならないのです。」これが裁判官の答えだった。

奇妙なことに、検察側は、彼らが自ら証拠物件として提出したテープを裁判所がなお聞くのを全力で阻止した。明らかに彼らは、収穫物が納屋にあると思ったのだ。

裁判官は唯々諾々と検事総長の希望に従い、弁護側のこの申請も却下した。

弁護人・検事の弁論の後、法廷は10月4日まで延期となり、この日に判決が言い渡されることになった。

この短い期間を、リリー・ヴェヒターは、ラシュタットの夫のところで過ごした。判決言い渡しがあっても、彼女は全く不安になることがなかった。彼女は、自分が義務を果たしたと分かっていた。自分が歩んだ道が正しいと分かっていたのだ。

この落ち着いた確信のうちに、1951年10月4日、彼女は、アメリカ人裁判官の判決を受け、法廷に入った。もともと小さな法廷は、人で溢れていた。皆緊張していた。数週間以来提起されていた問題への回答が、ついになされるのだ。アメリカ人は、リリー・ヴェヒターを、検察が求めるようにあえて刑務所送りにするだろうか。

判決言い渡しに同様にシュトゥットガルトに来た検事総長は、そう確信しているように見えた。裁判官が入廷するまで、彼は助手と、大声で厚かましい冗談を言いあっていた。

廷丁がいつものように3回ハンマーでたたくと、法廷内は静かになった。決定を知らせるのを躊躇しているかのように、暫くの間裁判官は、無数の書類をめくっていた。

ついに彼は、何度も中断しながら、詳論を述べ始めた。彼は、ドイツの法秩序に沿って、

まず判決を述べるのではなく、長々とした詳論で、どの程度「被告」が有罪かを述べ始めたのである。

「被告は、起訴状で主張されているように、2つの集会で、米兵が朝鮮の女性や子どもに対して犯したとされる残虐行為について報告したことを通じて、連合軍の損害に積極的に加担しましたか？」

そしてリリー・ヴェヒターは、起訴状が非難するように、北朝鮮の女性や子どもに米兵が犯したとされる残虐行為に関する主張を通じて、在独連合軍に対する非礼で敵意に満ちた態度をとりましたか？」

これが、法廷が明らかにすべき唯一の問題だと、ヤンキーは声を張り上げて続けた。被告の主張が正しいかどうかは、やはり問題ではないのだ。

何が真実で、何が真実でないかを確定することは、アメリカ人の判決には意味を持たなかった。なぜなら、米国では、他の帝国主義諸国と同様、階級裁判が「正しさ」を語るからだ。それは、ソ連や人民民主主義諸国、DDR（東独）で行われているように、人民が思う真実や法のために判決が下されるのではない。帝国主義に資する米国司法の決定は、いかなる場合も人民に敵対的だ。

裁判官は、リリー・ヴェヒターが話をした集会在公的なものだったという事実について延々と話をした。誰も、その反対のことを述べていないのに！

そしてついに裁判官は、弁護側の姿勢に言及した。「被告の弁護は、ハイデルベルクとルードヴィヒスブルクの集会で、彼女が直接間接に、在独駐留連合軍に関連づけていないという主張に基づいている。」

裁判官は実際に、ドイツから何千マイルも離れた米兵の態度に対する批判が、ドイツに駐留する米軍部隊への非礼な態度だと主張したいのだろうか？ そう、彼はそうしたいのだ。彼は、帝国主義のために、ウォール街から全世界に配置されている米兵を一体のものと見ているのだ！

朝鮮のアメリカ人に向けたいかなる論評も、在独部隊に対するのと同じくらい敵対的なのだ。

そこで裁判官にとっては、リリー・ヴェヒターが話をした集会在「平和を守る闘争」というスローガンで行われ、彼女が演説で繰り返し、自分の全力を平和を守ることに向けていることを強調したという事実を素通りすることが容易ではなくなった。

結局彼は、幾つもの証言で裏付けられたこの事実を、手を振って却下した。彼は、証拠調べに関心があるわけがない…。彼は、人々が彼を「裁判官」にする信頼が正当化されるための証拠を示さねばならない。

確かにリリー・ヴェヒターは、どんな理由、どんな事情から朝鮮行きに参加したか繰り返し強調し、検察側のどの証人も、彼女のこの説明に少しも反駁できなかった。ところがアメリカ人裁判官にとって、それは知るところではなかった。彼には、リリー・ヴェヒターは、「戦争と対立を目指す外国勢力の道具」なのであった。

「平和愛好の装いに隠れて、あなたは、殺戮と流血行為を報告した。」実際になぜ彼女がそうしたのはかは、帝国主義階級司法の代理人の知ったことではなかった。

彼は、リリー・ヴェヒターが主にアメリカ兵の残虐行為について報告したことを厳しく批判した。

朝鮮における蛮行においてアメリカ人が抜きんでていたのだから、リリー・ヴェヒターが、国連の印でそこで戦った他の外国軍隊よりも米軍について多く語らねばならなかったのは、必然であった。

裁判官はさらなる論述で、被告に対する敵対的な態度をもはや隠さなかった。ずっと彼は証拠調べを忘れ、証人が述べたことを忘れていた。ところが今になって、「ハイ・ポリテイクス」という漠然とした話題に取り掛かろうというのだ。確かに裁判官は、法律の規定に則って、公判で証人が述べた事実だけに基づいて意見を形成した。だが、この裁判で何が法律上の規定なのだろうか？

確かに検事総長は公判で、朝鮮での戦争勃発の責任をだれが負うかというリリー・ヴェヒターの説明に反論するのを、慎重に避けた。だが、それが裁判長に関係したのだろうか？彼は、リリー・ヴェヒターが集会で、朝鮮での戦争が米軍に支援された韓国軍によって始められたという証拠を示したことを、特に忌まわしいと呼んだ。「この主張で、被告は真の顔を示している！」

最後に裁判官は、リリー・ヴェヒターが、起訴された4点すべてにおいて有罪だときっぱり述べた。

深い動揺が法廷を通り抜けた。できるだけ速く終わらせるかのように急いで裁判官は、彼の前のある書類を脇に押しつけた。彼はリリー・ヴェヒターに、判決を言い渡されるために立ち上がるよう求めた。

仮借のない声で彼は、「第一の起訴に基づいて禁錮4か月と罰金7500マルク、第二の起訴に基づいて禁錮4か月と罰金7500マルク、第三の起訴に基づいて禁錮4か月と罰金7500マルク、第四の起訴に基づいて禁錮4か月と罰金7500マルクの有罪を言い渡します」と続けた。

「第一と第二の起訴による自由剥奪刑は、同時に執行されます。第三と第四の起訴による自由剥奪刑も、同様です。罰金刑についても、第一・第二の起訴と、第三・第四の起訴の分が重なります。したがってあなたは、合計禁錮8か月と罰金1万5000マルクの有罪です。」



【写真：リリー・ヴェヒターと夫、およびプリット氏・カウル氏の両弁護士】

最後に裁判官は、リリー・ヴェヒターが判決の法的確定までラシュタットを離れず、2名以上の人物と一緒に話もしない義務があると指示した。これによりリリー・ヴェヒターに対してアメリカの戦争放火魔とドイツの手先が行った訴訟手続きの第一段階が終わった。

フランクフルト（マイン）での控訴審を前に

この判決は、全平和愛好世界に、筆舌に尽くしがたい憤激を引き起こした。

民主法律家連盟は、リリー・ヴェヒターの真実を求める闘いを支援することにした。イギリスの老練弁護士、プリット会長は個人的に、フランクフルト・アム・マインの米控訴裁判所でリリー・ヴェヒターを弁護すると申し出た。私は、副弁護人として彼の助手となった。

11月に私たちは西ドイツで落ち合った。プリット氏はロンドンから、私はベルリンからやって来て、書面による控訴理由を確定した。

我々が提起した控訴に関する口頭弁論の日程が、1952年1月10日と決まった。我々がリリー・ヴェヒター—彼女は制限を課されていることから、このフランクフルト行きに米当局の特別許可を必要とした—と一緒に米控訴裁判所の法廷に現れると、そこは、傍聴席を確保しようと、既に朝7時から並んでいたあらゆる身分の女性たちで溢れかえっていた。

10時直前、マッコーリー米検事総長が法廷に入った。一見して不安げに、彼は、イギリスの流儀に従って銀髪のかつらとガウンをまとったプリット氏に挨拶した。

10時きっかりに、西独最高の米裁判官、クラーク氏が開廷を宣言した。

最初は、アメリカの訴訟手続きを開く際欠くことのできない形式に関するものであった。そこで私には、落ち着いて法廷の雰囲気之感銘を受ける時間ができた。必須のアメリカ国旗を背に3人の裁判官がいて、裁判長の両脇にカール・W・フルジューム氏とI・ロビンソン氏が陪席判事として座っていた。

一段高い裁判官席のすぐ下に、アメリカの法廷では不可欠の速記タイピストがいて、速記タイプライターを自動装置のように操っていた。

傍聴席の仕切りの前に、横長の机があり、そこに内外の報道機関代表が陣取った。既に1月9日、これらメディア代表は、フランクフルト平和委員会が招集し、イギリスの老練弁護士、プリット氏のほか、控訴審のためロンドンから西ドイツに来ていた国際民主女性連盟のイギリス代表、モニカ・フェルトン博士も参加した集会に顔を出していた。

裁判で、プリット氏が発言した。一切の誇張なしに、彼は一文一文、一審判決の不当性を述べた。

彼はまず、一介のドイツ女性が、自分が朝鮮で見聞きしたことを報告しただけで裁判で申し開きしなければならないことを指摘した。すぐに裁判長が遮った。「プリットさん、あなたは、被告が報告した残虐行為を、本当に自分の目で見たとお思いですか？」

プリット氏は答えて、判決の最大の弱点を巧みに指摘した。「シュトゥットガルトでの米地方裁判所での審理で、被告が述べたことが真実でないことを示す証拠は、全く出ませんでした。彼女の報告の正しさを示す証拠を提出することも認められませんでした。しかし、この裁判の意味を考慮すると、弁護側はなおこの点に戻る必要があります。」

それからイギリスの老練弁護士は、長めの陳述でまさに古典的な方法で、起訴の根拠となった法律第14号がそもそも意味することとその犯罪構成要件が意味することを述べた。

彼は、リリー・ヴェヒターがルードヴィヒスブルクとハイデルベルクの集会にそもそも参加したというだけで、検察側はそれらの集会がどんな目的で呼びかけられたのか証人を通じて確認させる労をとることもせず、一審の裁判官が彼女を有罪とした内的非論理性を立証した。

「でも実際、シュトゥットガルトで弁護側が提出した証拠物件からは、これらの集会が本当に平和促進のためだけに呼びかけられたことは明らかです」と、プリットは非常にエネルギーに続けた。「提出された証拠は、ルードヴィヒスブルクとハイデルベルクの集会で、違法な目的が立てられたという結論を決して許さないのであります。」

またもや裁判長が遮った。「プリットさん、シュトゥットガルトの裁判官は、リリー・ヴェヒターさんが犯罪行為を犯したことを確定し、ヴェヒターさんの本当の行動から彼女の意図も推論できた、ということではないですか？」

プリット氏は鋭く反論した。「もしそうなら、シュトゥットガルトで一いささかありきたりの言葉遊びをお許しください—自分の靴紐を前に引く、つまりできもしないことをしたことになります。なぜなら、法律第 14 号によれば、違法な集会が開かれないうちは、違法行為は何もないからです。難しいとは思いますが、もし一審判事の考えに従いたいのなら、ヴェヒターさんの演説によって、もともと合法的な集会が違法になり集会が違法になったので、ヴェヒターさんは集会参加の廉で有罪だ、というようにならなければなりません。」

プリット氏は裁判長に向かって、「この種の結論が法律に背くだけでなく、内なる非論理によって誤りが証明されていることを示すのに、さらに一言述べる必要はないでしょう」と言った。

裁判長はこの確認に何も反駁しなかった。彼は黙って書類をめくった。

イギリス人の弁護人は、リリー・ヴェヒターが完全に合法的な集会で、連合軍隊について何も不利になることを述べなかったと力説した。「リリー・ヴェヒターさんは、朝鮮で起こったことについて話したのであって、ここドイツにいる軍隊についてではありません。私の考えではこれは、この裁判で考慮すべき最も重要な点です。シュトゥットガルトの審理でどの証人も、リリー・ヴェヒターさんが、ドイツに駐留するアメリカ占領軍には一言も言及せず、朝鮮での米兵の行為について語っただけであることを確認せざるを得ませんでした。朝鮮における米兵の態度に関する報告を通じて、ドイツにおける米軍部隊が不利をかこつとは、いかにも不可解です。

もし一審判事の見解に従うなら、必然的に次は、アメリカ自体で支配的な社会状況に関する悪評をあえて喋ったドイツ市民を、ドイツに駐留するアメリカ部隊に不都合になるので、この法律第 14 号で処罰しなければならなくなるでしょう。」

それからプリット氏は辛辣に、シュトゥットガルトの判事が、できるだけ高い罰金刑を科す必要から、法律が定めた最高刑を越えたことを立証した。

最後にイギリスの老練弁護士は、リリー・ヴェヒターが演説で、在独米軍を誹謗したり何らかの不利益をもたらしたりする意図が全くなかったことを、完膚なきまで論述した。「もしヴェヒターさんが、自分が再点検した残虐行為について報告したのなら、その種の残虐行為を防ぐのに戦争を避けなければならないということを示すためだけに報告が行われたのだから、その行動に罰せられるべきところは何もありません。」

陳述の最後にプリット弁護人は検察に向かって、「シュトゥットガルトの判事は、リリ

一・ヴェヒターさんが正しいと思ったことを喋ったと理由で彼女を有罪にしました。この有罪判決は、自由な言論の権利をズタズタにしてしまったのではないのでしょうか？ それを守るために、アメリカは参戦したはずです。この判決は、最も原初的な民主的権利の抑圧を示しています。ドイツにおける民主主義が生きられるよう、一審判決は破棄される必要があります。」

イギリスの老練弁護士、プリット氏は、午前中いっぱい話をした。難しい、したがって時に抽象的な法的問題—特に法律第 14 号の吟味に際して扱わざるを得なかったが、法律の素人には縁遠かった—にもかかわらず、傍聴席の緊張感は少しも緩まなかった。審理初日の公判は、私が第二弁護人として発言した。

まず、朝鮮と朝鮮に駐留するアメリカ兵による残虐行為に関するリリー・ヴェヒターの報告が真実かどうかという問題が調べられた。「興味深いことに審理後半に自から起訴を主張した検事総長は、米兵の蛮行に関するリリー・ヴェヒターさんの報告に反論しようとしませんでした。反対に彼は、被告が自分の申し立てたことの実性を自分で証明できるとにきわめて異様な—こう言わざるを得ないのですが—激烈さで反対しました。シュトゥットガルトの審理で弁護側は二度、リリー・ヴェヒターさんが二つの集会で行った報告が真実であることを証明する申請をしましたが、二回とも却下されました。一回は、その種の申請を許可するには、何週間も何か月も審理する必要があるという、気を動転させる理由によつてです。裁判官が何週間も何か月も仕事するというのは、私の見方では、公正な判断を下すためであれば、決して過重ではありません。」

この瞬間に裁判長が、「ヴェヒターさんは、自分の報告が真実であると自ら主張しましたか？」と遮った。

「もしそうでなければ、敬愛するイギリスの友人、プリットさんも私も、あなたの前に立つわけがないのです！」裁判長は明らかに苛立っていた。この苛立ちを抑えるのに、彼は、高慢な叱責するような調子で喋る以外思い浮かばなかったのだ。

「カウル博士、傍聴席よりも法廷に向かって話をされるよう求めます。」

すると、シュトゥットガルトの審理で演じた役回りとは反対に、実に自制した印象を与えている検事総長は、リリー・ヴェヒターが求めた真実性の立証に対するきわめて異様な抵抗が綿密に再点検されるのを受け入れた。

「検事総長のような国民を代表する人物が、同じ国民同胞がおぞましい犯罪を行ったという主張の正しさを吟味するのを全力で阻止するというのは、いかにも奇妙ではありませんか？」

私はドイツ人で、ドイツであることが誇りだとはっきり申し上げます。しかし、この誇りから私なら、ドイツ人がドイツの名で残虐行為をしたという主張がきわめて綿密に再点検されることを迫るでしょう。もし抵抗すれば、この犯罪を隠蔽する、つまり私を彼らと同一化する疑念に晒されるでしょう。

裁判官の皆さん、皆さんの最も困難で最大の課題は、被告が残虐行為をしたと主張する人々と意識的・無意識的に同一化することを避けることだと思います。この主張の正しさを吟味するのに抵抗すれば、その姿勢と被告への有罪を通して、米兵が実際に朝鮮で行った蛮行と自己同一化することになります。」

裁判長は、唇を噛みしめた。そして「被告が有罪かどうかという問題にとって、彼女が

報告の際、それが敬意に反するはずだと分かっていたかどうかだけが決定的なのではないですか？」と口を挟んだ。

「裁判長、真実がどのように敬意に反したり非礼でありうるのでしょうか？」

「カウル博士、真実は人を傷つけるとしばしば言われます。国家が、真実によって傷つけられるのを禁じたければ、相当の法律を公布する権利があるのではないですか？」

「そうなると国家は、いかなる風習・道徳上の基礎をも失うことになると思います。私は、真実を述べることを禁じる法律など知りません。真実をめぐる闘争は、人類そのものと同じくらい古い歴史があり、何らかの形でそれ自体中傷でない真実を述べた者が、どの程度違反行為を行ったとしようのかは、法律よりずっと高い次元、つまり道徳的次元から精査する必要があると思います。

私はこの質問にノーと答えますし、私の立場は一般に妥当する法律観と一致すると思います。そうでなければ、昼休みにフランクフルト新聞で、バイエルン州知事自身が、幾つもの例を引き合いに出しながら、ある意見書で、在独アメリカ兵の悪い振る舞い・素行について苦情を述べた記事を読むこともできなかつたのではないのでしょうか？」

結局、シュトゥットガルトでリリー・ヴェヒターを訴えたやり口全体が綿密に再点検されることになった。裁判官は被告に対して先入観を持っていたのだろうか？ それが問題だった。もし先入観があつたとすれば、シュトゥットガルトでリリー・ヴェヒターに言い渡された判決は、既にこの理由から棄却となる。

判決理由書をじっくり読むと、それが、証人尋問が何の手がかりも提供せず、まさにでっち上げられたことに基づいていることが確認できる。

シュトゥットガルトでは、問題となったリリー・ヴェヒターの演説の文言を、証言を通して「再現」しようとし、この文言への疑念を拭い去るのに唯一適切な証拠物件を、何度も提示されたのに使わなかつた。アメリカ検察当局が存在すると主張し、弁護側が何回も再生を求めたテープが問題となった。この申請は、検察の緊急要請で却下された。同じ検察が審理冒頭、そのテープが、被告が行った演説の文言について情報を与えられると指摘したにもかかわらず、である。そこで、審理の対象には、演説全体ではなく、何が演説の目的なのかわからない—と理性的な人間なら認めざるを得ない—、恣意的に抜き出した断片だけになった。

つまりシュトゥットガルトの判事は、被告の演説の正確な文言を知らず、またそれを知ろうともせずに、判決を下したのである。

判決理由で彼は、審理全般を通じて全く話題にならなかつたことを確認した。何の良心の呵責もなく「被告は、戦争・征服に資する勢力の道具として、その委託を受け行動した」と断定したのである。判事はいったいどこからそれを知ったのか？ ヴェヒターさんが何らかの委託を履行して、疑わしい演説を行ったということについて、証人が訊問されたりしたのか？ シュトゥットガルトの審理では、この点について何も語られていなかった。

いかにしてシュトゥットガルトの判事は、被告をひどく貶める判決に至つたのか？

この疑問に対して、答えは一つしかない。判事は、法律が求めるように、提出された証拠物件に基づき、冷静で偏見なく合理的な省察に則つてではなく、リリー・ヴェヒターに対する純粋に政治的な先入見から判決を下したのである。

しかし、裁判官が先入見を持っていたら、彼が指揮した裁判、彼が下した判決は、適法

でないのではないか。

「さて、シュトゥットガルトでの被告に対する裁判手続きが適法に行われなかったことの最後の論証になります。ここで、朝鮮における敵対関係の責任が誰にあるかという問題に関して判事が判決理由に書いた事実の確定が問われます。」

裁判長は、衝撃を受けたように縮み上がった。「それが本件と何の関係があるのですか、カウル博士。」

「裁判長、その質問は私ではなく、先の判事になさってください。彼はこの質問を投げかけ、判決理由書で綿密に扱いました。それゆえ、弁護人としての私の義務が、それに立ち入るよう私に命じています。判事がこの問題を判決でどう扱ったかということこそ、彼がリリー・ヴェヒターに対して偏見を抱いていた最大の証拠であり、判決は適法でないからです。」

裁判長は何が何でも、朝鮮における紛争勃発の責任問題をさらに論議するのを阻止したかった。「誰が朝鮮で戦争を始めたか、この問題は、被告が連合軍隊に非礼で敵対的な態度をとったかどうかとは関係ないです。」

「裁判長、もしシュトゥットガルトの判事が判決理由でまさにこの問題を扱わず、そこからリリー・ヴェヒターさんに対する主な結論を導いたのでなければ、おっしゃる通りかもしれません。しかし実際はそうではなかったのですから、私は弁護人として先の判事が確定したことに向き合う義務があります。ですから、あなたの吟味は、原判決が適法だったかどうかを確定するのに非常に重要な意味があります。もし、文書に何も見つからないのであれば、177頁を開いていただけますか。そこで判事ははっきりと

『さらに、米兵に対する悪意と憎悪を広げようという被告の目的と意図は、彼女が問題の集会で、戦争が米国に支援された韓国が始めたという北朝鮮政府の主張を指摘したことで明白になった。』

と述べています。」

裁判長は度を失いそうになり、「カウル博士、何がしたいのですか？ 誰が朝鮮で戦争を始めたのか、今証拠を示そうというのですか？」と言った。

「それは難しいことではありませんが、ここでは、判事が審理を通じて少しも拠り所が示されなかったことを確定して判決を理由づけたことを示そうとしているだけです。そしてそれは、被告に対しシュトゥットガルトで行われた裁判手続きが不法だったことを証明しています。」

「どういうことですか、カウル博士」と、裁判長は懸命に自分を抑えた。「シュトゥットガルトの判事は、誰が朝鮮で戦争を始めたのか被告が語ったと述べただけです。その発言が正しいか間違っているのかについては、何も言いませんでした。」

「残念ながら違います。判事は判決で、アメリカの支援を受けた韓国が朝鮮の戦争を始めたという主張は誤りで根拠がなく、真実でないことが明らかになったと明確に確認しています。」

裁判長、お尋ねしますが、どこにその証拠が提出されたのですか？ シュトゥットガルトの審理でですか？ もしそこで提出されていたのなら、先の判事が利用できたでしょうに。でも証拠は全く提出されませんでした。審理全体を通じて、そのことには一言も触れず、どの証人もこの話題で尋問されませんでした。証拠を提出するのはごく簡単だったで

しょうに。」

裁判長は、机をドンと叩いて言った。「カウル博士、私は何度も、ここではもう朝鮮での戦争の責任問題については何も聞きたくないと指摘しました。必要に迫られれば、裁判長として私にあるあらゆる措置を講じて、この意志を重んじてもらうようにしますよ！」

「それでは私は、そのことについてなお何か言う状況にないですね。でも、証言聴取で少しも言及されなかった主張から被告への有罪を導くのが可能なのかをお尋ねすることは許されるのではないのでしょうか。」

裁判長は唇を噛みしめた。彼はおずおずと「それなら法律上の規定に適っていないでしょうね」と述べた。

「ということは、判決は適法でない確認に基づいていたとお認めにならざるを得ませんね。」

「ともかく私が否定できないのは」と言ってから、彼は少し間を置き、「先の判事がこの関連で間違いを犯したということです」と続けた。

裁判長のこのまさに強いられた告白は、傍聴席に深い動揺を引き起こした。それはまた裁判長に、どちらの側からであれヤジは絶対に許さないと怒鳴ることで、ばつの悪い状況から逃れる可能性を与えた。

「それをお認めいただいたことで、私の弁護人としての任務は果たせたと思います」と言って、私は午後まるまる要した陳述を終えた。

翌日 10 時ちょうどに審理が続けられた。今度は、検察側の代表、マッコリー検事総長が発言した。



写真：弁護人のプリット氏とカウル博士

彼はまず、イギリスの老練弁護士の前で、—おそらく丁重さからだけではなかったろうが—お辞儀を始めた。

それから彼は、弁護側の堅固な立場を揺り動かそうと試みた。つまり、被告が残虐行為の話をした朝鮮駐留の米軍が、ドイツに駐留する米軍とは同一でないという点である。

過去、連合国占領軍の一部としてドイツに派遣された何万人ものアメリカ兵の使命は、朝鮮で戦っている戦友の使命と変わらない。それゆえ、朝鮮でのアメリカ兵への攻撃は、同時にドイツでのアメリカ兵への攻撃

になる。「戦線はドイツから朝鮮に延びています」と彼の声が法廷に響いた。「この戦線の兵士たちには、戦場での弾丸だけでなく、彼らが共に生き共に戦わなければならない市民に対する敵意と中傷も当たるかもしれないのです。」

「被告には自由な言論の権利がある、ですと？ 私有財産、個人の自由、契約の自由、

自由な言論の権利、そう生存の権利そのものですら、どんな状況でも無制限の保護に値する絶対的な財ではないのです。その価値と、それに値する保護は常に、支配的な国家的必要との一定の関係性の中にあります。」

私は同じ台詞を、既に19年前、褐色の政党がドイツに氾濫した1933年に聞いたではないかと思った。

主張の真実性の証拠を示すのは、被告の権利のほうではないか？

「お笑い草です！ 被告の報告が正しいか正しくないかは、この公判にとっては、街角の演説家の演説が正しいか正しくないかと同じくらい意味がありません。そのお喋りという事実だけで、通りや広場での演説を禁じた条例に違反したのです。」

シュトゥットガルトの審理でテープを再生しなければならなかったのだろうか？ 「再生できる人が誰もいなかったのですから、履行不可能な要求でした。」

検事総長は、絶対誓えるというような身振りで「被告リリー・ヴェヒターは、自分が何を言ったのか正確に分かっていました」と大声で言った。

プリット氏は、薄笑いを浮かべて頷いた。だがそれは、アメリカ人検事総長の気には障らなかった。

「彼女の言葉からは、共産党宣言でおなじみの精神が窺えます。特にアメリカ、アメリカ人にとって聖なるものと対峙する精神です。」

リリー・ヴェヒターは、起訴された意味で罪を犯しました。したがって、シュトゥットガルトの判決を維持されるよう求めます。」

午後遅く、イギリス人弁護人がもう一度立ち上がった。アメリカ人検事総長の論告に反論するには、僅かの言葉で十分だった。

「敬愛する敵方さんは、」とプリットは眉をひきつらせて、「自分の立場を強めるのに、共産党宣言の精神を引用するのを正しいと考えました。私は、この宣言が、私たちが持つ最も人間的な文書の一つだろうとはっきり申し上げます。」

イギリスの老練弁護士は、その陳述をまとめて、シュトゥットガルトの原判決を破棄し、リリー・ヴェヒターを無罪とするよう、再度求めた。

法廷に流れた動揺は、彼の最終弁論が傍聴人に感銘を与えたことを裏付けた。時間が遅くなったにもかかわらず裁判長は、なかなか審理を終わらせなかった。他の裁判官にちょっと耳打ちした後、彼は最後に、法廷を無期限に延期し、判決は関係者に文書で送ると告げた。

弁護側の勝利ゆえ、裁判長がほとんど別の行動をとることができなかったとはいえ、この通告はいささか驚きだった。アメリカ人の法廷がいつ召集されるのか見通せなかったので、弁護側は、リリー・ヴェヒターがシュトゥットガルトの判事の指示により1951年9月7日以降服している個人的自由の制限を取り消す申請を出した。

見ものだったことに、米国人検事総長はいくらでも親切にふるまった。もちろん、この制約が取り消されるのに同意したのだ。

言を左右にしながら裁判長は結局、リリー・ヴェヒターがもはやラシュタットだけにとどまる必要はなく、どんな集会にも好きなように参加できると宣言した。

その晩、リリー・ヴェヒターと弁護人を迎えて、平和を愛好するフランクフルト市民が集まった。

だがリリー・ヴェヒターには、長い休暇をとる時間がなかった。その後数週間、彼女はハンブルクからミュンヘンまで、西ドイツ中で無数の集会で話をした。

当局はリリー・ヴェヒターを中心とするこの動きに、絶望的に抗った。集会は禁止され、この禁止を貫くため警察が動員されたが、徒労に終わった。

ドルトムント・エッセン・ニュルンベルク・ヴュルツブルクでのドイツの女性・母親に向けたリリー・ヴェヒターの訴えは、何千倍もの反響を呼んだ。アメリカは、法廷の措置を通じてリリー・ヴェヒターの口を封じられると信じていた。事実は反対だった。アメリカが彼女に対して起こした訴訟は、平和の維持と統一の強制というドイツ人の要求をアメリカ人の法廷自体にまで持ち込む可能性を彼女に与えた。

アメリカ人の控訴審は、判決を仕上げるのに7週間を必要とした。1952年2月29日、まるで体をなしていない形で判決が届けられた。

法廷は、リリー・ヴェヒターを法律第14号の第2条により罰する以上、控訴に基づき、一審判決を破棄せざるを得なかった。この関連で法廷は、イギリスの老練弁護士が公判で行った陳述に従った。

控訴審は、一審の証拠調べが、「サボタージュ、蜂起、転覆、その他連合軍隊に不利益を与える目的で」ルードヴィヒスブルクとハイデルベルクの集会が持たれたということの根拠とならなかったと認めざるを得なかった。それにより、法律第14号第2条で罰するのに不可欠の前提が崩れた。

第4条による控訴審判決は、その分無制限になった。シュトゥットガルトの判決が、西独アメリカ占領地区における言論の自由の権利を破壊したという弁護側の確認について、法廷は、米国人検事総長が述べた見地を取り入れた。

「私有財産、契約の自由、自由な言論の自由、個人の自由、そして生存の権利自体も、いかなる状況でも保護しなければならない絶対的な財ではなく、その種の権利の保護はむしろ、国家のその都度の状況による。」

この確認は、数多くの一最近アメリカでは当たり前になった進歩的人間への迫害に由来する一アメリカ自体の判例で証明できるということを通して、はっきりしなかった。

裁判官が、証拠調べでも根拠づけられなかった、リリー・ヴェヒターに対する個人的主張を通じて、偏見なき判決を下すことは不可能だと述べたという弁護側の異議について、控訴審は、リリー・ヴェヒターが北朝鮮政府の招待を受け入れたこと自体が既に、リリー・ヴェヒターが「暗黒勢力の道具」だという一審判決に盛り込まれた主張の正しさを示しているという大胆な論評で無視した。

一審でリリー・ヴェヒターの報告の正しさを証明することができなかったことを、控訴審は、次のような古典的論評で、全く問題ないとした。

「その場合、米軍は、自らを守る可能性なしに、いわば被告の立場に貶められたであろう。」

興味深いことに、裁判官は全員一致で判決を下したわけではなかった。むしろ裁判長が、アメリカの訴訟法を利用して、本筋から外れた立場を表明した。この事実は、アメリカ人がリリー・ヴェヒターに対していかに不安を抱いていたのかを如実に表している。クラーク裁判長は、どのみち他の裁判官の意見で判決が保障されていたので、心配なくそうできたのだ。

「ドイツは第二の朝鮮になってはならない！」

リリー・ヴェヒターは、シュヴェービッシュ＝グミュント近くのゴッテスツェルにあるヴュルテンベルク女性刑務所で懲役刑に服した。アメリカ軍事裁判所に刑の開始を申し出る1時間前、ドイツ民主女性連盟の一行が彼女を訪れ、団結と連帯のしるしに花束を手渡した。

100人以上の女性が、アメリカ軍事裁判所までリリー・ヴェヒターに付き添った。リリー・ヴェヒターが彼女たちとお別れをしている間、集まった女性たちは、裁判所前で怒りのシュプレヒコールを行った。「リリー・ヴェヒター万歳！」「リリー・ヴェヒターに自由を！」そうした声が繰り返し広場に響いた。

心のこもったお別れに感激し、しかし覚悟を決め、平和を守るという偉大な任務に仕えたという誇りを胸に、リリー・ヴェヒターは刑務所に入った。

ボン政府の厳格な指示に基づき、刑事囚に対する便宜が彼女には与えられなかった。それでも、彼女の素朴で飾り気のない本性と内なる確信は、刑務所職員も悟るところとなった。彼女の服役後に私がゴッテスツェルを訪れた際、彼女は、さまざまな女性看守があらゆる機会をとらえて彼女と話をし、彼女の闘いが事実誠実な全ドイツ人の闘いだと結局認めざるを得なくなったと報告した。

変わらぬエネルギーと行動力で、彼女は刑期満了後—そのことで彼女には1時間の猶予も与えられなかったのだ—、刑務所を後にした。



写真：1952年メーデーのデモで、ベルリン＝マルクス・エンゲルス広場のリリー・ヴェヒター

彼女は、真実のための闘争、平和維持のための闘争をたゆまず続けた。「ドイツは第二の朝鮮になってはなりません！」と、彼女はいろいろな集会で住民に呼びかけた。とりわけ女性・母親に対して、リリー・ヴェヒターは、子どもたちの命を心にかけるなら、一般戦争条約に反対し、ドイツ統一のために闘わなければならないと述べた。

今やアメリカは朝鮮で、細菌爆弾を投下し、ペストのような恐ろしい疫病が、平和を愛する朝鮮民衆の上に降りかかっている。もし平和を守るために全力を尽くさなければ、ド

イツもそれから免れないのである。

1952年、リリー・ヴェヒターはドイツ民主共和国に滞在した。私たちの再建に確信を抱き、女性がそれにいかに有意義に関わっているかを見るためにやって来たのだ。我々の祖国の首都、ベルリンで、5月16～19日に開かれたドイツ民主女性連盟の第4回全国大会に、リリー・ヴェヒターは来賓として出席した。ドイツ中から4000人の女性が派遣されたこの重要な大会は、統一と平和のための女性たちの闘いの強化一色だった。この大会が我が国の国境を越えて占めた大きな意義は、21か国から招待客が参加したことが示している。ドイツの女性たちはその闘いで一人ではなく、世界の平和を愛する女性が味方をしてくれた。ドイツ民主女性連盟は、1億3500万人を数える国際民主女性連盟の会員である。平和のための闘いにおける女性・母親たちのこうした広範な力は、これまで歴史上見られなかった。我が祖国の平和にとって極めて重大な危険が差し迫った時期に開かれたドイツ



民主女性連盟第4回全国大会は、ドイツ民族の幸福、我が祖国のために全力を傾け、新たな戦争が我々の町や村を荒廃させ、死と破滅が我が民族に降りかからないようにしようとするすべてのドイツの女性・母親の勇気と決意を表すものであった。若き平和の闘志、フィリップ・ミュラーが〔ロベルト・〕レール〔内相〕の雑兵の弾丸の嵐に倒れ、他の多くの愛国者も重傷を負ったエッセンの血の日曜日は、前兆となった。

【写真：ドイツ民主女性連盟第4回全国大会に敬意を表して、スターリン大通りでベルリン再建に携わるリリー・ヴェヒター】

「すべての力を動員しよう！ 何百万ものドイツ女性が、全世界の平和愛好女性とともに、自分たちが持ち、命を与えた最も愛すべきものを守るために、戦争放火魔に勇敢に断固として対峙しなければならない」と、ドイツ民主女性連盟第4回全国大会の宣言は謳った。そして、ドイツの女性・母親が言葉だけでなく行動において子どもたちの楯となり、ドイツ民主共和国で勤労者が自らの手で成し遂げた成果が、帝国主義の侵入者によって破壊されるのを許さないことが、大会で再三再四決然と表明された。

1952年5月26日、裏切り者アデナウアーはボンで、ドイツ民族の意思に反して「一般条約」〔ドイツ条約〕に調印した。この屈辱条約の調印によりアデナウアーは、ドイツ分断を深め、戦争の危険を高め、西ドイツにおける軍事独裁への道を地ならしする国民的裏切りを確証した。

だが、アデナウアーの署名は、ドイツ民族の署名ではない。西側諸国に対するソ連政府の覚書にあるように、ドイツ民族は、平和条約の達成、ドイツの国民的統一への独自の道を歩むであろう。

この高き目標のための闘争における確固たる拠点は、ドイツ民主共和国である。

この拠点を、帝国主義の戦争挑発者やドイツの手先は掘り崩そうとしている。彼らは工作員やスパイを送り、サボタージュを通じて住民の不安を煽っている。彼らは占領地区間の境界で、人民警察官を射撃して挑発し、情勢をますます緊張させようとしている。彼らには、人の命は物の数ではないのだ。

それゆえ、そしてとりわけ、西ドイツでの一般戦争条約の発効により、既にレールの予備警察として中核ができていた攻撃的傭兵部隊が結成されることになるので、我々はドイツ民主共和国で、故郷の武装保護を組織し、武力防衛を創出しなければならない。それは、アメリカ帝国主義者の委託を受け、それに奉仕するボン政府の傭兵部隊がやっているような再軍事化や軍国主義では決してない。

軍事的にあの勢力は、軍需産業の大富豪、銀行の頭取連中、大農に奉仕して、自民族の抑圧と他民族への攻撃的目標の実行のために組織されている。西ドイツにおける軍国主義は、西独勤労民衆を米英占領者の革鞭の下で押し潰すだろう。西独軍国主義は、ドイツ民族の国民的利益の不倶戴天の敵である。なぜならそれは、米国の権力者に奉仕し、西ドイツを戦争結集地に変え、西ドイツの傭兵を弾丸の餌食にしようとしているからである。

ドイツ民主共和国の国民的軍隊は軍国主義的でない。軍隊の性格にとって決定的なのは、国家が人民の手中にあるか少数の独占資本家の手中にあるかという、国家権力の本質である。

我々の国家権力、ドイツ民主共和国の国家権力は、人民の掌中にある。我々はヒトラーの軍需富豪や防衛経済指導者を処罰し追放した。だが西独では、ヒトラーの将軍たちが、再び攻撃的な傭兵部隊のトップに就いている。ドイツ民主共和国の武装防衛は、我々の故郷の保護、我々の大々的な成果、偉大な再建事業の防衛に役立ち、平和の維持に役立ち、幸福と平和のうちに生きたいという我が民族全体に役立つものである。

全ドイツの女性や母親は、勇敢に決然と夫や息子たちの側に立って、平和の維持と祖国統一のために闘うであろう。

輝かしい模範として彼女たちの先頭に立っているのが、恐れを知らない平和の闘士、リリー・ヴェヒターなのである。

(編集部注：本文中の朝鮮の人名・地名は、藤目ゆき編・解説「国連軍の犯罪 民衆・女性から見た朝鮮戦争」収録の「国際婦人調査団報告」を参考にした。一部、英文表記と漢字表記が適合しない場合には事例の内容が一致していれば同報告の表記を採用した。)